

歎異鈔第四章の「しかれば念仏まふすのみぞ」の 意義についての一考察

藤 岡 隆 男

序 文

歎異鈔第四章に¹⁾,

一、慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるときはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏まふすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云云。と、ある。

ここで、聖道の慈悲に対して、「浄土の慈悲」なるものを強調しているのであるが、それは「念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益するをいふ」のであります。これについて、香月院は、「念仏申シテ急ギ浄土ニ往生シテ、還相廻向ニヨリテ衆生ヲ濟度スルハ思ヒノ儘ナル故ニ、コレヲ末通リタル大慈悲心ナリト結ビタマヘリ……²⁾」と説明しているが、増谷³⁾、曾我⁴⁾、梅原⁵⁾、蜂屋⁶⁾、多屋⁷⁾、寺田⁸⁾等もこれと大同小異である。

また金子はこの「いそぎ」を「まづもって⁹⁾」或は「何をやめても⁹⁾」という意味に解しているが、まだ「いそぎ」の語の忠実とは云えない。福島は、「是等の私が大事に思うてゐた人々は、此の世を去ると同時に、『いそぎ仏になりて大慈大悲をもて』此の私を利益する仏陀の御使とも仏陀への御縁ともいふべきものであります¹⁰⁾」と、味わっていることには一応の敬意を表すが死後の成仏を説くことに変わりはないのであるから、能所の区別こそあれ、上記と大異はないように思われる。これに対して本多は、「唯円が『浄土の慈悲というのは、念仏して急いで仏になって、大慈大悲心をもて、思うままに衆生にご利益を与えることをいう。』と書いている。彼はさきほど引用した言葉の中で、『今生においては』と言っており、いま引用した言葉の中で『急いで仏になって』というのは、『急いで、死んで仏になって』という意味にとりぜん解される。彼は、親鸞が『往生』と言ったのを『死』と解しているようである。彼の了解した『極楽往生』は、この世に死んで極楽に生まれることであつた。往生を死と考えることは、当時の伝統としてはやむをえないが、せつかく親鸞がその独創的な体験から、浄土往生が現世に起こりうることを、愛弟子の一人である唯円が、とりちがえてしまったことは、かえすがえすも残念である。この第四章の言葉は、だいたいにおいて親鸞の言葉どおり記されていると思われるが、記憶によって書かれたし、浅い了解で書かれたから、大事のところでもちがってしまったのである¹¹⁾。」と「急いで死んで仏になって」と解して、しかもそれが親鸞の意志でないときめつけながらも、「いかに如来に帰一したからといって、現身でもって、魔法使いのように、不治の病いをなおすなどということはできない。この身にできることは、如来に救われた喜びを、ひとにも分かち、その人をさそつて念仏の門に入らしめ、現身の苦悩は苦悩のまま、心は浄土にいられるようにしてあげることだけだ。『だけ』というと、つまらぬことのようにだけれども、この「だけ」がたいへんな

ことなのだ。この苦悩にみちた世において、心の安穩を持つほど大きな幸福はないからである¹¹⁾。と、現身に成仏できないことは認めているのである。然らば彼は何時仏になって完全な慈悲をなし遂げようというのであろうか。

私は、先ず「いそぐ」義について、二、三の経・論・釈等について調べ、卓見をつけ加えさしていただき、次いで「しかれば念仏まふすのみぞ」の意義について考察した。

第1章 不急の事を諍う

無量寿経 卷下に

仏告彌勒菩薩・諸天人等。無量寿国声聞・菩薩、功德智慧不可称説。又其国土微妙安樂、清淨若此。何不努力為善、念道之自然、著於無上下、洞達無辺際。宜各勤精進、努力自求之。必得超絶、去往生安養国、横截五惡趣、惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。其国不逆違、自然之所牽。何不棄世事、勤行求道德。可獲極長生、寿樂無有極。然世人薄俗、共諍不急之事。於此劇惡極苦之中、勤身營務、以自給濟。無尊無卑、無貧無富、少長男女、共憂錢財。有無同然、憂思適等。屏營愁苦、累念積慮、為心走使、無有安時。¹²⁾

と、ある。

即ち、無量寿国の声聞や菩薩の功德や智慧は到底述べ尽くせない。また国土は安樂で清淨である。皆この功德を求めて精進努力すべきである。如何なる者も必ず迷の世界を超え、生死の絆を断ち切って安養浄土に生まれ、さとの道に昇ること極まりない。それなのになんで俗世間の事をなげうって、本願他力の大道を求めようとしないのであろうか。その道は、永遠の生命を得て無量寿の極まりない功德を得るであろう。ところがいまの世の人々は人情が薄っぺらであるばかりか、俗塵にけがれ、お互に急いで求むべき菩提をねがわず、急ぐに足りない世俗の汚れにみちた苦しみを、苦しみとも知らずに争い求めている。悪や苦しみの世を厭いもせず、ただ肉身を養うための仕事にはげんで生計を立てている。貴賤貧富老若男女、皆財産のことばかり心配し、有るものも無いものも同じように苦しんでいる。

まことに気も狂わんばかりに苦しみ悩みを重ねて、ただ欲の心のために走せつかわれて、安らかな時とてはしばらくもない。と、かく、不急の事を諍う人々のすがたを歎き、真に求むべきは安養の浄土であることをすすめられているのである。

歎異鈔第九章にも、「念仏まふしさふらへども、踊躍歡喜のころおろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらうべきことにてさふらうやらん」と、唯円が歎く以上に、親鸞聖人も歎かれたことであり、教行信証信巻末には、

誠知悲哉、愚禿鸞、沈没於愛欲、広海、迷惑於名利、大山、不喜入定聚之数、不伏、近真証之証、可恥可傷矣。¹⁴⁾

と、仰せられている。

ここに「定聚之数に入ることを喜ばず」とは、「念仏まふしさふらへども、踊躍歡喜のころおろそか」なることであり、「真証之証に近くことをたのしまず」とは、「いそぎ浄土へまひりたきころのさふらはぬ」ころでありましょう。

併し、聖人は、不急のことにかかわりはてて、いそぎ浄土へまいりたい心のないものを殊にあわれみたまう大悲大願をたのもしくおmoi、念仏三昧の生活をつづけられたことであろう。

清信土度人経の流転三界偈¹⁵⁾にも、

流転三界中、恩愛不能断
兼恩入無慈、真实报恩者。

と、断ち難い恩愛を断ち切って、無上涅槃を証してこそ、真实恩に報いる者ということが出来る
と説かれ、親鸞聖人は竜樹菩薩の智度論に「念仏三昧ハヨク種々ノ煩惱及ビ前世ノ罪ヲ除ク、余ノ三昧ハ一ノ障ヲ除キテ他ノ障ヲ除カズ、念仏三昧ハ一切ノ煩惱ヲ滅スル¹⁶⁾。」又、「菩薩因位ニ於テ有相ノ六度ヲ修シタルトキ般若ノ空ヲ聞キ信受スルコト能ハズ、返リテ般若ヲソシルガ故ニ無量劫無間地獄ニ落チテ苦ヲ受ケ、即生死輪転止ムコトナク、終ニ地獄ノ苦ヲノガレテ人間世界へ生レテモ、或ハ下賤ノモノニ生レテ死人ヲ荷フタリ、或ハ舌ノナキモノニ生レ、或ハ耳ノナキモノニ生ル、等¹⁶⁾」と説いてあるを引用され、高僧和讃の竜樹讚に¹⁷⁾、

一切菩薩ののたまはく
われら因地にありしとき
无量劫をへめぐりて
万善諸行を修せしかど

恩愛はなはだちがたく
生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし

と、断ち難い恩愛生死を、念仏三昧が能く断ち切って解脱せしめることを讃嘆してられる。

なおこの智度論の意を安樂集には、

依^ニ『大智度論』(卷七意)有^ニ三番^ノ解釋。「、、、、第三有^ニ三諸^ノ菩薩^ニ復^テ作^レ是^ノ言^ヲ。我^レ於^ニ因地^ニ遇^フ惡知識^ニ誹^テ謗^シ般若^ヲ墮^キ於^ニ惡道^ニ、經^テ無量劫^ニ雖^モ修^ス余行^ヲ未^レ能^ハ得^ル出^タ後^ニ於^ニ一時^ニ依^テ善知識^ニ邊^ニ、教^ヘ我^レ行^フ念^フ三昧^ヲ。其^ノ時^ニ即^チ能^ク併^シ遣^テ諸^ノ障^ヲ方^ニ得^ル解^脱。」¹⁸⁾

とあり、さらに名号の徳を大集月藏経を引用して、

彼^ノ『經』(大集月藏經卷一一・一七・二六等意?)云「、、、諸^ノ佛^ノ如^來有^ニ無量^ノ名^号。若^シ總^シ若^シ別^シ。其^ノ有^ニ衆^生繫^テ心^ヲ稱^ス念^ス。莫^ク不^レ除^テ障^ヲ獲^テ益^ヲ皆^シ生^レ佛^ノ前^ニ。即^チ是^ノ名^号度^ニ衆^生。」計^ス今^ノ時^ノ衆^生即^チ當^リ佛^ノ去^リ世^後第^四五^百年^ニ。正^シ是^ノ懺^悔修^シ福^ヲ心^ヲ稱^ス佛^ノ名^号時^者。若^シ一^ニ念^ス阿^彌陀^佛、即^チ能^ク除^テ卻^シ八^十億^劫生^死之^罪。一^ニ念^ス既^ニ爾[、]況^ヤ修^ス常^念。即^チ是^ノ極^ノ懺^悔人^也。」¹⁹⁾

とあり、名号を称えることが、生死の苦悩から救われる道であることを教えられる。

親鸞聖人は、あらゆる衆生は不急の事を諍い合って、苦悩の汚れた世界から逃れようとする気持のないのを悲憐して、阿弥陀如来はたゆまぬ真實清浄の心で、一切の功德が円かに満ちて、衆生の煩惱悪業に障碍されない六字の名号を成就し、如来の至心をこれら一切の人々に施されたのであり、この至心が衆生に現われて他力の信心と云われるのである。この至心というのは即ち至

徳の尊号南無阿弥陀仏を其の体としているのであると仰せられる。即ち、教行信証信巻（本）三
一問答至心類に、

仏意難測、雖然竊推斯心、一切、群生海、自從无始已來、乃至今日至
今時、穢惡汚染无清淨心、虚偽誑偽无真実心。是以如来悲憫一切苦
惱、衆生海、於不可思議兆載永劫、行菩薩行、時、三業、所修、一念一刹
那、无不清淨、无不真心。如来以清淨真心、成就円融无碍不可思議不
可称不可説、至徳以如来、至心、回施諸有、一切煩惱惡業邪智、群生海。
則是彰利他、真心故、疑蓋无雜。斯至心則是至徳、尊号为其體也²⁰

とあるが、この「一切ノ群生海、无始ヨリ已來、乃至今日今時に至ルマデ、、、、」というお
言葉の上に、聖人はご自身を含めて、不急の事を諍う一切の群生海を悲憫せられた阿弥陀如来の
眞実真心にふれられ、その者に与えられてあった眞に求むべき至徳の尊号南無阿弥陀仏を讃嘆さ
れているのではないだろうか。

第2章 「いそぐ」ことの意義

無量壽經巻上に

仏告阿難。法藏比丘、説此頌已、而白仏言。唯然、世尊、我發无上正覺之
心。願仏、為我廣宣經法。我当修行、撰取仏国、清淨莊嚴無量妙土。今我
於世速成正覺、拔諸生死勤苦之本²¹

と、即ち、法藏比丘は修行して衆生を迎えとるこの上なき妙なる浄土を建設し、世に於て速かに
いそいで正覺をひらき、その力で一切衆生の生死勤苦の本を抜かんと願われたのであります。そ
して、

諸仏告菩薩。令觀安養。仏聞法、樂受行、疾得清淨。処至彼、嚴淨国、便速得
神通。必於無量尊、受記成等覺。其仏本願力、聞名欲往生、皆悉到彼国、自
致不退轉。菩薩與至願、願己国無異。普念一切名、願達十方、奉事億、如
來飛化、徧諸刹、恭敬歡喜、去還到安養国²¹

と、十方の諸仏は菩薩方に、聞法と本願名号を聞信する道をすすめられ、それによって一時もは
やく浄土に生まれよ、彼の無量壽仏の清淨の国に至るならば、すみやかに神通を得、必ず等覺を
なると教えられる。無量壽仏の本願力は名号を聞信して往生せんと願えば、十方衆生皆悉く彼の
国に生まれることが出来、現在に不退轉を得る。菩薩も眞実の願をおこし、自らの国もまたかの
無量壽仏の国と異なることのないようにして、あまねく一切の衆生を濟度したいと思うならば、
その名はあきらかに十方に聞こえわたるであろう。されば速かに彼の国に往くことを願え、とす
められる。

みらたこの「其仏本願力、聞名欲往生、皆悉到彼国、自致不退轉」の一句は法然の「和語燈
録」でも引用され、

「其仏本願力、聞名欲往生、皆悉到彼国、自致不退轉」（巻下）という文あり。漢朝に女通律

師というものありき。小戒をたもてるものなり。遠行して野寺に宿したりけるに、隣房に人ありてこの文を誦す。玄通これをききて一両遍誦してのち、おもいだす事もなくておすれにけり。そのち、この玄通律師戒をやぶれり。そのつみによって閻魔の庁にいたる時、閻魔法王の給はくなんぢ仏法流布のところにむまれたりき、所学の法あらばすみやかにとくべしとて、高座にのぼせ給ひき。その時玄通高座にのぼりておもひめぐらすに、すべて心におぼゆる事なし。野寺に宿してききし文あり。これを誦せんとおもひいでて「其仏本願力」という文を誦したりしかば、閻魔法王たまのかぶりをかたぶけて、これはこれ西方極楽の弥陀如来の功德をとく文なりといひて礼拝し給いき。願力不思議なる事、この文に見えたり²²⁾。」とある。

これは地獄の苦しみからすみやかに救われることを教えているが、それは本願名号を聞信することであることを示していると思われる。この文はまた教行信証行巻²³⁾に引用されており、尊号真像銘文²⁴⁾にそのご自釈がのせられてある。しかして無量寿経巻下にはまた、

人能自度、転相拯濟、精明求願、積累善本。雖一世、勤苦、須臾之間、後生無量寿仏國、快樂無極²⁵⁾。

とあって、今生の勤苦は須臾の間のこと、無量寿仏の国こそ、永遠の快樂極りなきところであるから、無量寿國に生まれたいという真実の願を起こして精進努力せよ、と釈尊が弥勒菩薩にお告げになっている。

仏説無量清淨平等覺經卷二には、

今吾説仁諦聽衆、世界諸菩薩到須阿提、礼仏聞歡喜、廣奉行、疾得至淨処、

我前世有本願一切、人聞説法、皆疾來生我國、吾所願皆具足、從衆國來生者皆悉來到此、問一生得不退轉、若菩薩更興願、欲使國如我刹、亦念度一切人、令各願達十方、速疾超便可到安樂國之世界、至無量光明土、供養於無數、

阿弥陀仏、輒隨其本宿命求道時心、所喜願、大小隨意、為説經、輒授之、令其疾開解得道、皆悉明慧、各自好喜、所願經道、莫不喜。

とあり、「我前世有本願……」の文は教行信証行巻²⁶⁾に引用されており、「疾疾超便可到……」の文は教行信証真仏土巻²⁷⁾ならびに愚禿鈔巻上²⁸⁾に引用されている。開華院法住は上の文中、「速疾超」とは凡夫直に報土に至る横超頓速の利益なりといい、「安樂國之世界」とは、安樂國は西方の淨土を指し、「之世界」とは、十方諸仏の淨土を指し、「之世界」とは十方諸仏の淨土悉くこれ弥陀の淨土ならざるはなし。元來我が法王家は諸仏の淨土にあらず、尽十方無碍の弥陀の光明の至る処即ち諸仏の地となる。諸仏は即ち弥陀の化身、十方仏國みな弥陀淨土の内なり、故に十方諸仏の淨土をみな引きつかねて「安樂國之世界」と云う。弥陀はこれ諸仏の本師なり、名号は万善の根本なり、極樂は諸仏の本國なり、故に無量光明土と云う。即ち十方法界悉く弥陀淨土の内、尽十方無碍光如来の在す淨土なるが故に無量光明土と云い、廣大無辺際と云うなり²⁹⁾。」と説明している。

而してこの文は、阿弥陀仏の本願を聞信することによって、一切ノ人直に、横超頓速に淨土に生まれ、所願皆満足され、かつこの世にあっては不退轉位を得ることを説かれてあるのであろう。しかしてまた同經巻三には、

仏言。無量清淨仏国諸菩薩・阿羅漢衆等、大道聚會、、、、精進求願、心終不復中廻、意終不復轉、終無有懈極時。雖求道外若遲緩、内独駛急疾、容容虚空、中適得其中、中表相応、自然嚴整、檢斂端直、身心淨潔、無有愛欲、有上、所適食、無有衆惡瑕穢。、、、世人薄俗、共争不急之事³⁰とある。而して、

仏説阿彌陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経卷下では、「阿彌陀仏国諸菩薩・阿羅漢衆等、大聚會、、、、³¹⁾」となっており、即ち弥陀の浄土に生まれることに決定づけられた正定聚不退転の者を指すのではなからうか。即ち正定聚不退転の者が道を求むるすがたは、外からみるとおそくまわり道のようにはあるが、内心は疾く疾く急いでいるのである。しかも和やかでかたよらず、自然に嚴整端直、身心淨潔で、愛欲があっても貪愛して共に溺れることなく、いろいろの欠点やら醜いものがない、と。

而して仏説無量清淨平等覚経卷四には、

仏言。師、開導人、耳目・智慧明達、度脱人、令得善舍泥洹之道。常当慈孝於仏、如父母上、常念師恩、当念不断絶、即得道疾³²⁾。

とあり、これは仏説阿彌陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経卷下³²⁾にもあって、仏に仕えること慈父母に仕えるごとく、また常に師の恩を念じておれば、疾く道を得ることを説いてあるのである。

また、大宝積経卷第十八、無量寿会第五之二に、

彼、觀殊勝、刹菩薩衆、無辺願速成菩提、淨界如安樂³³⁾、、、、と説き、また阿逸多、是故菩薩摩訶薩、欲令無量諸衆生、等速疾安住、不退転於阿耨多羅三藐三菩提、及欲見彼、廣大莊嚴、授殊勝、仏刹圓滿功德者、心当起精進力、聽此法門³⁴⁾。

と説かれてある。東方恒河沙の諸仏の国の恒河沙の菩薩衆は、無量寿仏とその菩薩衆の無辺なるをみて、速かに菩提を成じ、それぞれの浄き界を安樂浄土の如くしたいと願いを起したことが説かれてあり、また、無量の諸の衆生に速に疾く不退転の位に安住せしめんと欲し、精進努力して聞法すべきことをすすめられるのであります。

仏説大乘無量寿莊嚴経卷上の頌に、

願我得仏清淨、	法音普及無辺界、
宣揚戒定精進、	通達甚深微妙法、
智慧广大深如海、	内心清淨絶塵勞、
超過無辺惡趣門、	速到菩提究竟岸、
、、、	、、、
百千俱胝那由他	恒河沙数、仏世尊
令我成就寂滅果、	復有十方諸仏刹
恒放光明照一切、	殊勝莊嚴無等倫、
願我成就利群品、	所有無辺世界中
輪廻諸趣衆生類、	速生我刹受快樂、

不_レ久_ク俱_ニ成_ニ無_レ上_ニ道_一 願_{ハク}我_ガ精_シ進_シ、恒_ニ決_シ定_ス、
 常_ニ運_ニ慈_心拔_ニ有_レ情_一 度_ニ尽_ニ阿_鼻、苦_ク衆_生、
 所_レ發_ス弘_ク誓_{ハク}永_ニ不_レ斷_ス 35)

とあり、前「速ニ」は作法自ら速に彼岸に到らんと発心したのであり、後の「速ニ」は一切の衆生を速かに我が國に招き入れて快樂を与えんととの誓でありましよう。ひらにその齋願は、

(二〇)

世尊、我得_ニ菩_提、成_ニ正_覺、已_ニ我_ガ居_ス宝_刹、所有_ニ菩_薩、發_ニ大_道心_一、欲_ニ以_テ真_珠・瓔_珞・宝_蓋・幢_幡・衣_服・臥_具・飲_食・湯_藥・香_華・伎_樂承_テ專_ニ供_養、他_方世_界無_量無_辺、諸_佛世_尊、而_レ不_レ能_レ往_、我_於爾_時、以_ニ宿_願力_一令_レ彼_、他_方諸_佛世_尊、各_レ舒_テ手_臂至_ニ我_ガ利_中、受_テ是_レ供_養、令_レ彼_速成_ニ阿_耨多_羅三_藐三_菩提_一 35。

(二四)

世尊、我得_ニ菩_提、成_ニ正_覺、已_ニ我_ガ居_ス宝_刹、所有_ニ菩_薩、以_ニ百_千俱_胝那_由他_種種_珍宝_造作_ニ香_妒、下_從地_際上_至空_界、常_ニ以_テ無_價栴_檀之_香普_薰、供_養十_方諸_佛、令_レ得_速成_ニ阿_耨多_羅三_藐三_菩提_一 35。

(二五)

世尊、我得_ニ菩_提、成_ニ正_覺、已_ニ所_居、仏_刹廣_博、嚴_淨光_瑩如_レ鏡、悉_ニ昭_見無_量無_辺、一_切、仏_刹。衆_生觀_者、生_ニ希_有心_、不_レ久_速成_ニ阿_耨多_羅三_藐三_菩提_一 35)

(二六)

世尊、我得_ニ菩_提、成_ニ正_覺、已_ニ所_有十_方無_量無_辺無_数、仏_刹声_聞・緣_覺、聞_ニ我_ガ名_号、修_持淨_戒、堅_固不_退、速_坐道_場、成_ニ就_ニ阿_耨多_羅三_藐三_菩提_一 35)

と、あり、以上四つの齋願は、いかにしても諸仏を供養せしめて、速かに、或いは久しからずして速かに阿耨菩提を得しめ度い。或いは名号を聞信し堅固不退にして速かに道場に坐し（菩提を成ずるためのよりどころとなる発心、修行をつづけ）阿耨菩提を成ぜしめ度いと誓いであります。

ひらに阿耨勝下には、

仏告_ニ慈_氏。若_レ有_ニ苾_芻・苾_芻尼_、人_・非_人等_、於_ニ此_、經_典書_写供_養、受_持讀_誦、為_レ他_演說_、乃_至於_ニ一_晝夜_、思_惟彼_刹及_レ仏_身功_德。此_、人_命終_、速_得生_レ彼_、成_ニ就_ニ阿_耨多_羅三_藐三_菩提_一。 35)

と、こゝではひらひらと念終して速かに我が國に在することを奪て阿耨菩提を成就することが誓われてある。

また孝養淨土公婆娑には、

又舍利子、若_レ諸_、有_レ情_、聞_レ彼_、西_方無_量壽_佛清_淨仏_土、無_量功_德衆_所莊_嚴、皆_レ應_ニ發_願生_レ彼_、仏_土。所_以者_何、若_レ生_レ彼_、土_、得_レ与_レ如_レ是_、無_量功_德衆_所莊_嚴諸_大士_等同_一集_會受_用如_レ是_、無_量功_德衆_所莊_嚴清_淨仏_土大_乘法_樂、常_ニ無_レ退_轉、無_量行_願、念_念增_進、速_証無_上正_等菩_提 35、

又舍利子、於此、雜染堪忍世界、五濁惡時、若有淨信諸善男子或善女人、聞說如是、一切世間極難信法、能生信解、受持演說、如教修行、當知是人甚為希有。無量無邊所曾種善根、是人命終定生西方極樂世界、受用種種功德莊嚴清淨仙土大乘法樂、日夜六時親近供養無量壽佛、遊歷十方供養諸佛、於諸佛所聞法受記。福慧資糧、疾得圓滿、速証無上正等菩提。(37)

と、即ち、此の雜染濁惡の時、衆生極難信の法を聞説して、能く信解して、教の如く修行することは甚だ稀であるが、西方極樂世界に生まれると、種々の功德によって莊嚴された清淨仙土の大乗の法樂を受け、無量の功德樂に莊嚴され、無量壽佛に親近供養し、法を聞いて受記せられる。そして疾く自利々他圓満し、すみやかに仏のひとり証するとある。

竜樹の十住毘婆沙論第五易行品第九には、

行大乘者、如如是、説、發願、求三仙道、重於、拳三三千大千世界。汝言、阿惟越致地、是法甚難、久乃可得、若有易行道、疾得至阿惟越致地者、是乃怯弱下劣之言、非是大人志幹之説。汝若必欲聞此方便、今當説之。仏法有無量門、如世間道有難有易、陸道步行則苦、水道乘船則樂。菩薩道亦如是。或有勤行精進、或有以信方便、易行疾至阿惟越致地者。、、、如、是、諸、世、尊、今、現、在、十、方、若、人、疾、欲、至、不、退、轉、地、者、應、以、恭、敬、心、執、持、稱、名、号。(38)

とあり、何方の易行によって疾く不退転に堪るといふ、また名号を執持して疾く不退転地に至ることが説かれてある。なおこの文章は、往生廻兼卷下末39、教行信証行卷40、六度鈔第二41にみ引用されている。

無量壽經變論論願生願には、

觀仏本願力、遇無空過者、能令速滿足功德大宝海(42)、、、心知菩薩如是、修三五門行、自利利他、速得成就阿耨多羅三藐三菩提、故。(43)

とあり、これは無量壽經變論論願生願評卷下で次のように評述されている。即ち、

何者莊嚴不虛作住持功德成就、偈言、觀仏本願力、遇無空過者、能令速滿足功德大宝海、故。

「不虛作住持功德成就」者、蓋是阿彌陀如來、本願力也。今當略示不虛作之相、不能住持、用顯彼不虛作住持之義。、、、所、言、不、虛、作、住、持、者、依三本法藏菩薩、四十八願、今日阿彌陀如來、自在神力。願以成力、力以就願。願不徒然、力不虛設、力願相荷、畢竟不差、故曰成就(44)、、、

菩薩如是、修三五念門行、自利利他、速得成就阿耨多羅三藐三菩提、故。仏所得法名、為阿耨多羅三藐三菩提。以得此菩提、故名、為、仏、今言、

「速得阿耨多羅三藐三菩提」、是得早作仏也。、、、問曰。有何因緣、言「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」。答曰。論言、修三五門行、以自利利

他成就故。然覈求其本阿弥陀如来為増上縁。他利之与三利他。認有左右。若自仏而言。宜言利他。今將談仏力。是故以利他言之。當知此意也。凡生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行。皆縁阿弥陀如来本願力故。何以言之。若非仏力。四十八願便是徒設。今取的取三願。用証義意。願言。「設我得仏。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。縁仏願力。故十念。念仏便得往生。得往生故。即勉三界輪轉之事。无輪轉故。所以得速一証也。願言。「設我得仏。國中。人天。不下正定聚。必至滅度者。不取正覺。縁仏願力。故住正定聚。住正定聚。故必至滅度。无諸廻伏之難。所以得速二証也。願言。「設我得仏。他方。仏土。諸菩薩衆。來生我國。究竟必至一生補處。除其本願。自在所化為衆生。故被弘誓。鎧積果徳。本度脱一切遊諸仏國。修菩薩行。供養十方諸仏如来。開化恒沙无量衆生。使立无上正真之道。超出常倫諸地之行。現前修習普賢之徳。若不爾者。不取正覺。縁仏願力。故超出常倫諸地之行。現前修習普賢之徳。以超出常倫諸地。行故。所以得速三証也。以斯而推他力為増上縁。得不然乎。」

と、而してこの文は、教行信証行卷44)及び真仏土卷44)に引用されてある。またこの「功德大宝海」については、「一念多念文意」に『功德」とまふすは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功德みちきわまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめむとなり。しかれば金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに大宝海とたとえたるなり45)』とある。

開華院は、応知者等。二積応知。法蔵菩薩の不行は全く利他のための故に御修行なされ、其の利他行が自ら自利行となる。利他行成就すること能はずして自利し給うこと能はずと云うこと知るべしと云うころなり。菩薩如是修五門行等。三積速得菩提二。初本論。菩薩とは法蔵菩薩なり。此の如く法蔵菩薩五念門の行を兆載永劫の間御修行なされて、ついに其の自利利他円満して十劫正覺の曉に速に阿耨菩提を成就することを得給へるが故に、今日煩惱具足凡夫、纔かなる称名の一行に自利々他の行円満具足して、凡夫直ちに報土に至り、願土に至り、願土に至れば速かに無上涅槃を証ることを得ると云う論文のころなり。

問云、法蔵菩薩の正覺御成就は三大阿僧祇劫ばかりにあらず、不可思議兆載永劫の御修行成就して、而して後に漸く十劫の昔正覺を得給ふ。然るに、今弥陀の正覺成就のことを速得菩提と云うは云何。

答云、此の速の字は法蔵菩薩の自利に約する速の義にあらず。凡夫直ちに報土に至り、速に阿耨菩提を得しめ給ふ、凡夫成仏の速なることを願はず速の字なり46)。と、また、遠山諦観は、「是得早作仏也」に註して、はやく仏になる。薪を燃さんがために木の火箸を用いれば、薪よりも先づ火箸の燃ゆる如く、衆生済度のために自利利他の行を修したまひし法蔵菩薩は、その行によりて衆生に先んじて早く仏になりたまへるなり47)。と説明している。善導大師は往生礼讃偈を作って、このよろこびを讃嘆している。即ち、

讚仏諸功德。無有分別心。能令速満足。功德大宝海。願共諸衆生。往生安

衆國南無至心歸命禮西方阿彌陀仏⁸⁵⁾と。

略論安樂浄土義には、

仏本願力莊嚴住持諸功德遇者无空過能令速満足一切功德海⁴⁸⁾

と、あって、これらの意を親鸞聖人は高僧和讃に、

本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし⁴⁹⁾

と、うたわれてある。

この和讃を註釈して、開悟院は、「天台大師ハ浄土ノ法門ヲ弘通スルニハ全ク鸞師ノ積ニヨリ給フ。ソノ十疑論ノ中ニ觀仏本願力ノ本願力ヲ相承シテ、此土ニ於テ不退ニ至ラント欲スルハサナガラ陸路ヲ行クガ如シ。故ニ浄土ニ生ルレバ仏ノ大悲願力ニヨルガ故ニ速ニ不退ニ至ル、ト。今一首ノ依文ハ浄土論ニ觀仏本願力遇無空過者能令速満足功德大宝海トアル是ナリ。此ノ四句ノ偈文ノ拠ハ大經ノ其仏本願力ノ經文、弥勒附属ノ經文、令諸衆生功德成就ノ經文、如来智慧海ノ經文。コレ等ノ經文ヲ引キ集メテコノ四句ノ偈文ヲ造リ給フ。コレラノ經文ハ残ラズ第十八願ノ經文。ソノ顯ス所ハ願成就ノ經文。此故ニ仏本願力トハ仏力本願力。二種ノ他力ヲ含蔵スルハ南無阿彌陀仏ノ名号ナリ。故ニ仏ノ本願力トハ名号、遇フトハ信心歡喜乃至一念。故ニ銘文本觀仏本願力遇無空過者トイフハ如来ノ本願力ヲミソナハスニ願力ヲ信ズルヒトハムナシクココニトマラストナリ等トアリ、然レバ遇ト云フハ願力ヲ信ズルコト、空シクスグルヒトナシトハ即得往生住不退轉。コレ不退轉正定聚ナリ。能令速満足、功德大宝海ノ二句ハ、即得往生住不退轉ノ所以ヲ述ブルナリ。ソノ故ハ仏ノ本願力ヲ信ズルモノハ功德大宝海ヲ満足セルガ故ニ空シク娑婆ニ止ラザルベシ。本願力ニアヒヌレバトハ信ズルコト、ムナシクスグルヒトゾナキトハ空シク娑婆ニトマラナイ人ニ正定聚不退轉。ヒトト指シタノハ煩惱成就ノ凡夫人。宗祖ハ二門偈ニ、觀彼如来本願力凡愚遇無空過者一心專念速満足真實功德大実海ト凡愚ノ二字ヲ加ヘテアル。ヨク本願力ヲ信樂スルヒトハスミヤカニトク功德ノ大宝海ヲ信者ノソノミニ満足セシムルナリ等トアリ、法徳ニ就テ煩惱惡業ト名号功德ト唯一味トナル。コノ一味ノ利益顯現スルハ浄土ニ往生シテ後ノコト。煩惱即菩提、生死即涅槃ノ顯レル処ハ浄土。今ハソノ法徳ニ約シテ現生ノ利益トシ給フ⁸⁶⁾。」と云い、また、偈文の「速満足」の「速」の字を長行の論釈より次の三義をあげている。即ち、

1. には、本願を信ずるたちどころに不可思議の功德を速かに満足する。功德を満足するが故に速かに不退の位に至る。即ちこの時の速の字は現生の利益。

2. には、この不虛作功德の偈文をば長行に釈して、七地已還の未自在の菩薩、弥陀の浄土を願生して浄土に生まれて速かに阿彌陀如来を見奉るなり。速に寂滅平等身の証を開き自在の働をなす。この不虛作功德の本願力のなす所ゆえに、偈文の当意は凡夫に約して速の字を明し、論の長行は聖者に約して、速の字を明す。然れども兼ねては凡夫にも通ず。煩惱具足の凡夫も浄土に往生すれば竜樹、天親と同じく速かに寂滅平等身を得る。

3. には、五念門を修すれば速かに無上菩提を成就することを得ると。偈の速の字は論の終でみれば、本願を信じ行ずるもの弥陀の浄土に往生するなり速かに無上涅槃の証を開くこと、是不虛作の願力のなすところなり。中において、速かに不退に至るは十一願のなすところ、速かに寂滅平等身を得るは二十二願のなすところ、速かに無上涅槃を得るは十一願必至減度の願力のなす

ところ、かく三速をみつめてみれば、第十八願の願力のなすところである。本願を信ずるなり速かに功德の宝海を満足する義が、この一首に顕わされている。功德を具足するが故に速かに不退に至る⁸⁶⁾。と。

さらに、同じく高僧和讃に、
不退のくraisすみやかに
えんとおもはんひとはみな
恭敬の心に執持して
弥陀の名号称すべし⁴⁹⁾

と。これは十方十仏章の偈文の、若人疾欲至不退転地者以恭敬心執持佛名号⁵⁰⁾等の文による。恭敬の心に執持してとは本願ころにかけしめてと同じ。本願を憶念するたちどころに速かに不退転の位に至る。故に行住坐臥に称うる念仏は往生定りつる上の念仏なり。是をば正信偈には、唯能称如来号⁵¹⁾報大慈弘誓願と、仏恩報謝の称名と定め給う。疾の字は速と云うも同じで、願成就の即得往生の即の字の意で、即とは横超の義を顕す。凡夫自力を以ては速なること能わず。如来の横超他力によるが故に速に不退に入る。選択本願の力用により信心歡喜の一念に六趣四生の因果忽に滅して速に往生定まる。是を即得往生住不退転と名くる。教行信証信卷末に横超者即願成就一実円満之真教真宗是也とあり、即の一字、横超他力を顕す。また臨終一念の夕べ速に真実報土に往生すという。信卷末に | 念無臥臥疾超⁵²⁾証無上正真道故曰横超也と。執持とは弥陀經に、聞說阿彌陀仏執持名号⁵³⁾とあり信心のこと。弥陀經孤山疏に、執持佛名謂出世如教心⁵⁴⁾とあり信じて長く散失せざること。化卷に、執持一心即一心⁵⁵⁾略文類に執持即一心、一心即信心とあり、執持というは即利他の一心、無碍光如来に歸する一心。即、願成就の聞其名号の信心。弥陀の名号称すべし、とは常に弥陀の名号を称する行住坐臥の易行の念仏のことなり。不退については起信論義記下末に願生淨土が勤めてあり、速に初住不退に至らんと欲せば弥陀の淨土を願生すべし、弥陀の淨土に往生すれば速に正定不退に至る、とあり。馬鳴菩薩、天台大師、淨影、慈恩、懷感ら皆彼土の正定聚を立つ。竜樹菩薩は仏智をさぐりえて、即時入必定と十住論に説く。親鸞の現生不退もこれによられている。また、如来会十一願成就の經文に、知所畏畏不⁵⁶⁾能⁵⁷⁾了⁵⁸⁾知⁵⁹⁾彼國故⁶⁰⁾等の文を見ると、邪定聚不定聚は淨土に往生する因を得ること能わず、唯正定聚の人のみ往生する因をうる、とあり。大經流通の經文に、聞說阿彌陀⁶¹⁾佛於⁶²⁾無⁶³⁾上⁶⁴⁾道終不⁶⁵⁾退⁶⁶⁾轉とあり、これを讚弥陀偈に解釈して、說無大千世界火亦⁶⁷⁾不⁶⁸⁾過⁶⁹⁾聞⁷⁰⁾仏名聞⁷¹⁾阿彌陀⁷²⁾不⁷³⁾復⁷⁴⁾退と云う。親鸞は和讃にこれをうけて「たとい大千世界にみてらん火をもすぢゆきて 仏の御名をきくひとは ながく不退にかなうなり」と。又阿彌陀經に、是諸善男子善女人皆為一切諸仏共所護念皆得不退轉⁷⁵⁾と、又、欲生阿彌陀仏國者⁷⁶⁾是諸人等皆得不退轉於阿彌陀多羅三藐三菩提⁷⁷⁾とあって、弥陀の名号を信ずるものは六方諸仏の為に守られ護念されるが故に、かって三惡道へしりぞかず、進むところは唯無上涅槃なり。觀經に 光明照照⁷⁸⁾十方世界念⁷⁹⁾仏衆生⁸⁰⁾取⁸¹⁾不⁸²⁾捨⁸³⁾とあり、これに善導、現生不退の義を立てている。此を親鸞讚嘆して末燈鈔に「真實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚のくらいに住す等」と云う。行卷に、十方群生⁸⁴⁾命⁸⁵⁾斯⁸⁶⁾行⁸⁷⁾信⁸⁸⁾者⁸⁹⁾取⁹⁰⁾不⁹¹⁾捨⁹²⁾故⁹³⁾名⁹⁴⁾阿彌陀⁹⁵⁾仏⁹⁶⁾是⁹⁷⁾曰⁹⁸⁾他⁹⁹⁾力¹⁰⁰⁾是¹⁰¹⁾以¹⁰²⁾竜樹¹⁰³⁾大¹⁰⁴⁾士¹⁰⁵⁾曰¹⁰⁶⁾即¹⁰⁷⁾昔¹⁰⁸⁾入¹⁰⁹⁾必¹¹⁰⁾定¹¹¹⁾曇鸞¹¹²⁾大¹¹³⁾師¹¹⁴⁾云¹¹⁵⁾入¹¹⁶⁾正¹¹⁷⁾定¹¹⁸⁾之¹¹⁹⁾聚¹²⁰⁾などとのたまう。この鸞師の釈をうけ伝へたのが道綽、更にこれを相承して善導は和讃に蒙光觸者心不退と現生不退の義をあらわす。併し源信は現生不退を述べず。併し要集上末に、我亦在¹²¹⁾彼¹²²⁾取¹²³⁾中¹²⁴⁾煩¹²⁵⁾惱¹²⁶⁾障¹²⁷⁾眼¹²⁸⁾離¹²⁹⁾不¹³⁰⁾能¹³¹⁾見¹³²⁾大¹³³⁾悲¹³⁴⁾無¹³⁵⁾

廻 經 聖 師 等とあって、信心の不退なることは論を俟たない。法然上人は選択集の教相章に鸞師の論註の即入大乘正定之聚の文を引用。かくの如く七祖相承して現生正定聚現生不退の義を立つ。平生業成の義を親鸞が願し給うたのは全く私心からではない⁸⁵⁾という。

また、偈文の当意は現益の速の字であるが長行の終りに至っては当益に約して、本願を信ずる人浄土に生るなり速に無上涅槃の証を開く。この速の義は願土にいたればすみやかに無上涅槃を証してぞ等とある一首にあらわしてある⁸⁶⁾。即ち、

願土にいたればすみやかに
 無上涅槃を証してぞ
 すなわち大悲をおこすなり
 これを廻向となづけたり⁴⁹⁾

と。願土とは御左訓クワントハミタノホンセイヒクワントナリとあって本願力成就の報土で、煩惱成就の凡夫の働きで速かなりと思ふべからず。如来の願力によるが故に速かなりと願すが論註の釈。願土にいたればすみやかに無上涅槃を証すると云うは、如来本願によるが故に速かなり。正しくは十一願力、速かに無上涅槃を証するは横超の菩提心なり。其の本を求むれば阿弥陀仏の願力による。すなわち大悲をおこすなり、、、、とは、還相の証果を示す。すなわちと云うは無上涅槃の体に即する用なることをあらわす。無上涅槃の体に即する涅槃の大用が還相の利益なり。大悲とは衆生化益の大悲、廻向とは阿弥陀如来の本願力の廻向、即ち二十二の願力廻向で、略文類に、娑 出 娑 賢 難 法 華 經 第 三 十 二 品 第 十 二 偈 曰 願 土 速 證 無 上 涅 槃 證 聖 果 也とあり、因も果も往も還もみな如来の本願力の廻向なり。一月天上にありて影万水に宿るが如く心の儘に利他の行を修する、という⁸⁶⁾。

また浄土に生まるれば速に寂滅平等身の証を開く義は、

如来浄華の聖衆は
 正覚のはなより化生して
 衆生の願樂ことごとく
 すみやかにとく満足す⁴⁹⁾

にあらわしている。浄土に生まるれば速に菩薩の功徳を我身にうると願し給う意で、浄土の菩薩は正覚の華より化生して、望むところの諸願をば速に満足する。この願とは論註下に云うとおり浄土の菩薩の願うところは、仏を供養し、衆生を済度せんとの願なり⁸⁶⁾と。

而して金子は、この供養諸仏ということが求道の精神である、と云い、曾我は供養というのは本当の求道だと、こういうふうにいふか、あるいは求道するのが本当の供養だということになる⁸⁷⁾、と云っている。

以上曇鸞法師註解による無量寿經優婆提舍願生偈註巻下の「速」の字の三義を、親鸞聖人は和讃の天親讃にあらわしていられるのである。

而して、安樂集巻下には、

第五大門、中^レ有^レ四^レ番^レ料^レ簡^レ。第一^ニ汎^{シテ}明^ス修^ス道^ニ延^ス促^ス、欲^シ令^テ速^ニ獲^テ不^レ退^ス。、、、
 第一^ニ汎^{シテ}明^ス修^ス道^ニ延^ス促^ス、就^テ中^ニ有^レ二^ニ。一^ニ明^ス修^ス道^ニ延^ス促^ス、二^ニ問^答解^釈。一^ニ明^ス延^ス促^ス者[、]但^レ一^切衆^生莫^レ不^レ厭^苦求^レ來^レ畏^縛求^レ解^{。皆}欲^シ早^ク証^ス無^上菩^提者[、]先^ニ須^ク發^ス菩^提心^ヲ為^ス首^{。此}心^難識^難起^{。縱}令^テ發^ス得^此心[、]依^テ經^終須^ク修^ス十^種行[、]
 謂^フ信[・]進[・]念[・]戒[・]定[・]慧[・]捨[・]護^法・發^ス願[・]廻^向進^ニ詣^テ菩^提。然^レ修^ス道^之身^相統^不絶^{。選}二^万劫^始証^ス不^レ退^位。当^今凡^夫現^名信^想輕^毛、亦^曰假^名亦^名不

定聚、亦名外凡夫。未出火宅。何以得知。據菩薩瓔珞經。具弁入道行位。法爾故名難行道。又但以一劫之中。受身生死。尚不可數。況一萬劫中。徒受痛燒。若能明信。願生淨土。隨壽長短。一形即至位階。不退。与此修道一萬劫。齋功。諸仏子等。何不思量。不捨難求。易也。如俱舍論中。亦明難行・易行二種之道。難行者。如論(卷九意)說云。「於三大阿僧祇劫。一劫中。皆具福智。資糧六波羅蜜一切。諸行一行業。皆有三百萬。難行之道。始充一位。是難行道也。易行道者。即彼論(卷九意)云。「若由別有方便。有解脱者。名易行道也。今既勸歸極樂一切。行業悉廻向彼。但能專至壽盡。必生得生彼國。即究竟清涼。豈可不名易行之道。須知此意也。一問曰。既願往生淨土。隨此壽盡。即得往生者。有聖教証不。答曰。有七番。皆引經論証成。、、、、、第七引諸經証成。、、、、、又大悲經(卷二意)云。「何名為大悲。若專念仏相統。不絶者。隨其命終。定生安樂。若能展轉相勸行念仏者。當知此等。悉名行大悲人。是故涅槃經(北本卷九・南本卷一七意)云。「仏告大王。假令開大庫藏。一月之中。布施一切衆生。所得功德。不如有人稱念仏一口。功德。過前不可校量。50)、、、、」。

いでは修道の難速を明かにして、速に不退轉の位を獲得せしめようとの意が述べられてある。

一切の衆生は皆苦を厭い樂を求め、碍りをおそれて無碍自在を求めないものはない。而してその無碍なる仏のひとりをお早く証したいと欲する者は、皆菩提心をおこすことが第一である。併し菩提心をおこしても、十種の行を修め、その行をつづけること一萬劫を経て始めて不退轉の位につくことが出来るという。併し当今の凡夫は、信想輕毛で一劫の間も道を行ずることは出来ない。

しかるに、仏の教を聞信して淨土に往生せんと願えば、その人のこの世の寿命に多少の長短はあっても、「一形即至りて位不退階」とあって、この世で早くも不退轉の位につき、修道一萬劫の功德と同じ位につく易行道のあることを説き、淨土に往生せんと願えば、この世の寿命尽きる時、即ち、すみやかに往生を得ることを、俱舍論によって証明し、更に大悲經、涅槃經によって証明している。而して、引用の大悲經には、「專念仏相統」とあり、涅槃經には「仏稱スル」とあるので、「念經ヲ信ジテ」とは、「弥陀の本願を聞信して、念仏申す」ことを意味していると思われる。

また、

第七大門中。有三番。料簡。第一門中。此彼取相。料簡縛脱。第二次明此彼。修道用功。輕重而獲報。真偽。故勸向彼。

第一此彼取相。料簡縛脱者。若取西方淨相。疾得解脱。純受極樂。智眼開朗。若取此方。穢相。唯有妄樂。癡言。厄縛。憂怖。、、、、、

第二段中。明此彼修道用功。輕重而獲報。真偽者。若欲發心。歸西者。單用少時。禮・觀・念等。隨壽長短。臨命終時。光台迎接。迅至彼方。位階不退。50)

とあり、ここに「西方ノ浄相ヲ取ラバ疾ク」と云い、「命終ノ時ニ臨メバ迅ク」と云って、この「疾ク」、「迅ク」は、命終後の、解脱を得ること、浄土に至ることのはやくすみやかなることを意味している。

また、

第三「積ニ往生ノ意者、就中ニ有リ二。一、積ニ往生ノ意、二、問答解釈。第一、問曰。今願シ生ニ浄土ニ、未レ知ラ作ニ何ノ意也。答曰。只欲疾ク成ニ自利・利他ノ利物深広ト云々、問曰。願シ生ニ浄土ニ、擬レ欲ニ利物者、若爾所拔衆生今現在此、已能發ニ得此心、只応ニ在此拔シ苦衆生、何因得此心、竟先願シ生ニ浄土ニ。似ト如捨ニ衆生ニ自求ニ菩提ノ樂也。答曰。此義不レ類。何者如シ『智度論』(七卷七)云。譬ト如シ二人俱ニ見ニ父母眷屬、没ニ在深淵。一人直ニ往シ、力ヲ救フ之、力、所レ不及、相与俱没。一人遙ニ走リ趣ニ一舟、船ニ乗リ來テ濟接ニ並得、出レ難。菩薩亦爾。若未ニ發心ニ時、生死流轉スルト与ニ衆生、無レ別。但已ニ發ス菩提心ニ時、先願シ往シ生ニ浄土ニ、取ニ大悲、船ニ乘リ無礙、弁才ニ入リ生死海ニ濟ニ運ニ衆生。二『大論』(八卷三)復云。『菩薩生ニ浄土ニ、具ニ大神通ニ弁才無礙ニ教化ニ衆生ニ時、尚不能レ令ニ衆生、生シ善滅シ惡、増道進シ位、稱ニ菩薩、意ニ若即ニ在穢土ニ拔濟者、闕ニ無此益。如ニ似ト逼レ鶏ヲ入レ水。豈能レ不レ濕也。』三『大經』讚(讚彌陀)云。『安樂仏國、諸菩薩、夫可ニ宣説ニ隨ニ智慧、於己ガ万物ニ亡ニ我所、淨若ニ蓮華、不レ受レ塵、往來進止若シ汎舟。利安ヲ為レ務ト捨ト適莫、彼己猶空斷ニ想、然智慧、炬照ニ長夜、三明六通皆已足、菩薩万行觀ニ心眼、如レ是、功德無ニ辺量、是故至レ心願シ生レ彼』⁵⁰⁾

と、即ち、浄土に往生せんと願う心は、疾く、いそぎ自利・利他円満し、深く広く衆生を利益救済せんとする心であることを示している。

抜苦せんとする衆生は現に娑婆世界にあり、その衆生を救済せんと欲しながら、先づ浄土に生まれんと願うのは、たとえば二人の人があって、ともに、父母眷屬が深い淵に溺れているのを見た時一人は直ちにとび込んで、力の限り救おうとするが、やがて力尽きて、共々に溺れてしまう。他の一人は遙かに一艘の船のところまで走って行き、その船に乗って救済すれば、共々にこの水の難を逃れることが出来る。智度論には、菩薩も同様で未だ菩提心を発さぬ時は、衆生と変りはないが、発心した時は、先づ願をおこして浄土に往生し、仏の大慈大悲心を以て、生死の衆生界に入って無碍なる弁才を以て法を説き、衆生を救済し浄土に導き入れる、とあり、また、菩薩が浄土に往生して無碍の弁才を以て衆生を教化する時も、此の穢土では苦を抜き救済することは出来ない。そして安樂仏國に於ける諸の菩薩は、その功德ははかり知れない。だから真剣に浄土に生まれんと願うのである、という。

觀經玄義分卷第一には、

我等愚癡、身軀劫來流轉、今逢ニ釈迦仏、末法之遺跡、彌陀、本誓願、極樂之要門、定散等廻向、速証ニ無生身⁵¹⁾

而して皆往院は、定散等廻向ト云ウハ要門ヲ解スレバ定散ヲ廻向スルコト、弘願ヲ掘ケバ念仏他力ノ廻向ナリ。廻向ト云ウハ如来ノ廻向ナリ。速証無生身ノ一句、菩薩ノ意ハ総ジテ極樂ノ証果ヲ明スナリ。菩薩ニ報土化土ノ判釈ナシ。則下ニ明ス唯報非化ノ浄土ニシテ、真トモ假トモ名

ラレヌナリ。導導ハタダ一土ノ判ナリ。速証ハ聖道ノ漸証ニ簡ビ、無生ハ多ク淨土ノ不退ヲ指ス。コレヲ今祖師ノ宗義ヨリ判ズルヲキハ、速証無生身ハ弘願ノ機ノ往生ナレバ眞実報土ノ益ナリ52)。と。また、

第一即以道理来破者、上言初地至七地已来、菩薩者、如『華嚴經』說初地已上七地已来、即是法性生身、變易生身。斯等曾無分段之苦。論其功用已經三大阿僧祇劫、隻修福・智・人・法、兩空、、、、如『經』(三度論)說、「此等、菩薩名為不退、身居生死、不為生死所染、如鵝鴨、在水、水不能濕、如『大品經』(二度論)說、「此位、中菩薩、由得二種、真善知識、守護、故不退。何者、一、是十方、諸仏、二、是十方、諸大菩薩、常以三業、外加、於諸善法、無有退失、故名不退位也。、、、然此等之人、三塗永絕、四趣不生。現在雖造罪業、必定不招來報。如仏説言、此四果、人、与我同坐解脫牀。、、、然諸仏、大悲於苦者、心偏愍念、常沒衆生、是以勸歸淨土。亦如溺水之人、急須偏救、岸上之者、何用濟為。以斯文証。」

と、この分段とか變易とは、勝鬘經に、「有二種死。何等為二。謂分段死不思議變易死。分段死者。謂虛偽衆生。不思議變易死者。謂阿羅漢辟支仏大力菩薩、意生身。乃至究竟無上菩提。58)」とあって、變易生身の菩薩は三大阿僧祇劫を経て、六波羅密の行を修めた菩薩で、これ等の菩薩は自力修行によって得た不退の位にあり、身は生死にあっても、その汚れに染まず、鵝鴨が水に入っても湿らざるごときものである。而してこの菩薩は十方の諸仏や大菩薩の守護があるので退転することがない。然るに諸仏の大悲は生死に苦しむ者に向けられ、ひとえに常没の衆生を愍念し、すすめて淨土に帰せしむる。水に溺れたような人はいそいで救いあげねばならぬ。岸の上にいるような人は何で済む必要があるか。と常没の衆生なればこそいそぎ救わねばならぬというのである。

これはまた、北本涅槃經の、

父母之心非不平等、然於病子、心則偏重、如來亦爾於諸衆生、非不平等、然於罪者、心則偏重

とあるおこころであろう。

觀經正宗分散善養卷第四には、

唯發一念厭苦、樂生諸仏境界、速滿菩薩大悲願行、還入生死、普度衆生、故名發菩提心也53)。

とあって、菩提心を発すとは、速かに彼土に往生して、大悲の願行を満足し、再び生死界に還って普く衆生を済度せんとねがうことだという。

また、

然望仏願、意者、唯勸正念、稱名往生、義疾不同雜散之業。如此、經及諸部中、處處、廣歎、勸令稱名、將為要益也。心知53)。

とあり、これは選択集(下)54)にも、教行信証化身土卷(本)55)にも引用されてある。

而して開華院は、仏の願意は唯稱名往生にありて、往生の利益の速なること雜散の業に同じからず。ゆえに「觀經」及び諸經の中に処々に広く弥陀の名号を讃嘆して凡夫入報の要点とす

る56), と云う。また,

下輩、下行下根、人、十惡・五逆等、貪瞋、四重、偷僧、誘正法、未、曾、慚、愧、悔、前、愆、終時、苦相、如、雲、集、地獄、猛火、罪人、前、忽、遇、往、生、義、知、識、急、勸、專、稱、彼、仏、名、化、仏、菩、薩、尋、声、到、一、念、傾、心、入、宝、蓮、(53)

とあって、前非を悔いる想もなく、臨時の苦しみに、善知識のいそいで専ら念仏することの勧めにあって、一声念仏称えたと浄土の蓮の花の中に入るが、障り重く多劫を経て花開き、その時始めて菩提心を発す。即ち、一声の念仏による浄土往生を認めながら、現生で不退転、念仏申す生活のなかったものは、多劫を経て初めて、前掲の菩提心を発すことが説かれてある。

私に考えると、ここに念仏すると云うことは、ただ単に念仏、殊に臨終念仏でなく、不退転の位、念仏する身になることの平生業成の意義の重大なることを顕はしていると思われる。

往生要集卷上本には、

如、三、經、(雜、阿、含、經、卷、三、四、經) 偈、云、「一、人、一、劫、中、所、受、諸、身、骨、常、積、不、腐、敗、如、毗、布、羅、山、一、劫、尚、爾、況、無、量、劫、我、等、未、曾、修、道、故、徒、歷、無、辺、劫、今、若、不、勤、修、未、來、亦、可、然、如、是、無、量、生、死、之、中、得、人、身、甚、難、縱、得、人、身、具、三、諸、根、亦、難、縱、具、三、諸、根、遇、三、仏、教、亦、難、縱、遇、三、仏、教、生、信、心、亦、難、故、大、經、(北、本、卷、三、三、意) 云、「生、人、趣、者、如、爪、上、土、墮、三、途、者、如、十、方、土、法、華、經、(卷、一) 云、「無、量、無、数、劫、聞、是、法、亦、難、能、聽、是、法、者、此、人、亦、復、難、而、今、適、具、此、等、緣、當、知、心、離、苦、海、往、生、淨、土、只、在、今、生、而、我、等、頭、戴、霜、雪、心、染、俗、塵、一、生、雖、尺、希、望、不、盡、遂、苦、日、日、下、獨、入、黃、泉、底、之、時、墮、多、百、踰、繕、那、銅、然、猛、火、中、雖、呼、天、叩、地、更、有、何、益、乎、願、諸、行、者、疾、生、厭、離、心、速、隨、出、要、路、莫、入、宝、山、空、手、而、歸、(57)

とあって、無量生死の中に、人身を得ること難く、仏の教法に遇い、信心を得ることは、まことに難中の難事である。生死の苦海を離れて浄土に往生すべきは、ただ今生だけである。いそいで生死の苦海を厭離する心を起し、速に生死を出離する要の教法に随うべきことを教えられている。また、

『宝、積、經、五、十、七、偈、曰、「、、、難、陀、汝、當、知、如、我、之、所、説、昼、夜、常、繫、念、勿、思、於、欲、境、若、欲、遠、離、者、常、作、如、是、觀、勤、求、解、脫、處、速、超、生、死、海、(57)』

とあって、教のとおり昼夜常に浄土を念じ、欲に穢された娑婆世界のことを思ってはならない。若しこの穢土を遠く離れ度いと願うものは、常にこの想をなして涅槃を勤求するならば、速に生死の苦海を超えることが出来ると、宝積経に説かれてあることを示して、速かに生死の苦海を超える方法を示されている。さらに往生要集卷上下には、

於、三、諸、衆、生、得、大、悲、心、自、然、增、進、悟、無、生、忍、究、竟、必、至、一、生、補、處、乃、至、速、証、無、上、菩、提、(59)

とあって、これは浄土に往生した者の見仏の利益として、速かに無上菩提を証する意である。また、

問。為^レ專^ニ其^ノ心^ヲ、何^ノ故^ヲ於^レ中^ニ唯^ニ勸^ム極^ニ樂^ヲ。答。設^ヒ勸^ム余^ヲ淨^ク土^ヲ、亦^レ不^レ避^レ此^ノ難^ヲ。仏意難^シ測^リ、唯^ニ仰^シ信^ス。譬^ハ若^ク癡^ク人^ノ墮^リ於^レ火^ノ坑^ニ、不^レ能^ク自^ラ出^ル、知^リ識^リ救^フ之^ヲ、以^テ一^ノ方^ヲ便^ニ、癡^ク人^ノ得^ル力^ヲ、心^ヲ務^ク速^ニ出^ス。何^ノ暇^ヲ縱^ニ橫^ニ論^シ余^ヲ、術^ヲ計^シ。行^ク者^モ亦^ニ爾^ニ、勿^ク生^シ他^ノ念^ヲ。〇

と、あつて、自分のばかりいをして、強説をせよとせよ時、力を奪ひ、速かに生死を出づることを出来ぬことを憂へている。

卷上未^レ行^ハ、

如^ク是^ノ、隨^テ事^ニ常^ニ發^ス心^ヲ、願^フ願^フ令^ニ此^ノ衆^ノ生^ヲ速^ニ成^ス無^ニ上^ノ道^ヲ。願^フ我^ノ如^ク是^ノ、漸^ニ漸^ニ成^ス就^ス第一^ノ願^ヲ行^フ、円^ニ滿^ニ檀^ノ度^ヲ速^ニ証^ス菩^提、廣^ク度^ス衆^ノ生^ヲ、願^フ我^ノ如^ク是^ノ、漸^ニ漸^ニ成^ス就^ス第二^ノ願^ヲ行^フ、断^ツ諸^ノ惑^ヲ業^ヲ、速^ニ証^ス菩^提、廣^ク度^ス衆^ノ生^ヲ、願^フ我^ノ如^ク是^ノ、漸^ニ漸^ニ成^ス就^ス第三^ノ願^ヲ行^フ、学^ブ諸^ノ仏^ノ法^ヲ速^ニ証^ス菩^提、廣^ク度^ス衆^ノ生^ヲ。触^レ一^切事^ヲ常^ニ作^シ用^シ心^ヲ。我^レ從^テ今^ノ身^ニ漸^ニ漸^ニ修^ム学^ブ、乃^チ至^リ生^ニ極^ニ樂^ニ自^ラ在^ス学^ブ仏^ノ道^ヲ、速^ニ証^ス菩^提、究^ク竟^ニ利^シ生^ヲ。若^ク常^ニ懷^キ此^ノ念^ヲ、隨^テ力^ニ修^ム行^フ者^モ、如^ク滂^ク雖^モ微^ニ漸^ニ盈^ク大^ノ器^ニ、此^ノ心^ヲ能^ク持^シ巨^ク細^ク万^ノ善^ヲ、不^レ令^ク漏^レ落^セ、必^ズ至^リ菩^提。如^ク『華^ノ嚴^ノ經』入^レ法^ノ界^ノ品^ニ（晋^ノ訳^ノ卷^ノ）云^ク、「譬^ハ如^ク金^ノ剛^ノ能^ク持^シ大^ノ地^ヲ不^レ令^ク墜^レ没^セ。菩^提之^ノ心^モ亦^レ復^シ如^ク是^ノ、能^ク持^シ菩^提、一^切願^ヲ行^フ、不^レ令^ク墜^レ没^セ於^レ三^ノ界^ニ。」云^ク。問^フ。凡^ノ夫^ノ不^レ堪^ハ常^ニ途^ニ用^シ心^ヲ、爾^ノ時^ニ善^ノ根^ヲ為^シ唐^ノ捐^{ナリ}耶^{。答^フ。若^ク至^リ誠^ニ心^ヲ念^フ口^ニ言^フ。我^レ從^テ今^ノ日^ニ乃^チ至^リ一^ノ善^ヲ不^レ為^シ己^ノ身^ニ有^ル漏^ノ果^ヲ報^シ、尽^ク為^シ極^ニ樂^ニ、尽^ク為^シ菩^提。究^ク此^ノ心^ヲ後^ニ所^レ有^ル諸^ノ善^ヲ、若^ク覺^シ不^レ覺^シ自^ラ然^ニ趣^ク向^ス無^ニ上^ノ菩^提。〇}

と、あつて、衆生をして速かに無上道を成せしめたいという願を發念するに於ては、善善に願行を成就し、速に菩薩を誦したいとの念願を棄いて修行すれば、何時かは必ず成し遂げられる。凡夫も強説心もて心に仏を念じ口に念仏を誦せば自然に無上菩提におもむく、という。しかして、ひらた、

『入^レ法^ノ界^ノ品^ニ（晋^ノ訳^ノ卷^ノ）云^ク。「譬^ハ如^ク有^ル人^ノ得^ル不^レ可^レ壞^ノ業^ヲ、一^切怨^ノ敵^ヲ不^レ得^ル其^ノ便^ヲ、菩^提摩^訶薩^ノ亦^レ復^シ如^ク是^ノ。得^ル菩^提心^ヲ不^レ可^レ壞^ノ法^ノ業^ヲ、一^切煩^ノ惱^ヲ・諸^ノ魔^ヲ・怨^ノ敵^ヲ所^レ不^レ能^ク壞^ス。譬^ハ如^ク有^ル人^ノ得^ル住^シ水^ノ宝^ノ珠^ニ嬰^シ瑠^ノ璃^ノ其^ノ身^ニ、入^リ深^ク水^ノ中^ニ而^モ不^レ没^ス溺^ス。得^ル菩^提心^ヲ住^シ水^ノ宝^ノ珠^ニ、入^リ生^ノ死^ノ海^ニ、而^モ不^レ沈^ス没^ス。〇

と、あつて、しかもこの菩薩心があれば生死の苦海に沈むこともないことを明している。

ひらた、正住菩薩心願の意を引いて、

如^ク是^ノ、人^ノ等^ノ復^シ勝^ス法^ヲ、若^ク求^ム菩^提利^ヲ衆^ノ生^ヲ、彼^ノ等^ノ衆^ノ生^ノ最^ニ勝^ト者^{ナリ}。此^ノ無^ニ比^ノ類^ノ況^ハ有^ル上^ニ。是^ノ故^ニ得^ル聞^ク此^ノ諸^ノ法^ヲ、智^者常^ニ生^シ樂^シ法^ノ心^ヲ、当^ニ得^ル無^ニ辺^ノ大^ノ福^ヲ聚^シ、速^ニ得^ル証^ス於^レ無^ニ上^ノ道^ヲ。〇

とあつて、上菩提を求め、下衆生を利益すれば、これは最勝人である。そして法を聞く尋法を樂う心を生じ、はかり知れない功徳を身にうけて速かに無上道を成とするであろう、と仏の國に生を俾た諸の衆生の徳をうたっている。卷中本には、

依^テ此^ノ等^ノ義^ニ心^ヲ念^フ口^ニ言^フ、所^レ修^シ功^ノ徳^ト及^シ以^テ三^ノ際^ニ一^切善^ノ根^ヲ、其^ノ廻^ク向^ス自^ラ他^ノ法^ノ界^ニ、一^切衆^ノ生^ヲ、平^等利^ヲ益^シ、一^切滅^シ罪^ヲ生^シ善^ヲ、共^ニ生^シ極^ニ樂^ニ、普^ク賢^ニ行^フ願^フ速^ニ疾^ニ円^ニ滿^ニ、自^ラ他^ノ同^ク

証、無上、菩提、尽、未來際、利益、衆生、其、廻施、法界、其、廻向、大菩提、其 60

とあって、これらの意味によって心に念じ口に称え、身に修するところの功德と、及び三世一切の善根とを、あらゆる一切の衆生に廻向して平等に利益し、罪を滅し善を生じて共に極楽に生じ極楽に生じて普賢の行願をできるだけ疾く円満になしとげ、自他同じく無上の菩提を証して未来永遠に衆生を利益し、広く法界にさし向けて施し、大菩提に廻向する。即ち廻向の為には極楽に生じて速疾に普賢の行願を円満になしとぐ可きことを明かにされている。

また巻中末には「心地観経」(巻三)を引用して、

唯願諸仏垂加護、能滅一切顛倒心。願我早悟真性源、速証如来无上道。61)

と、この語は、諸仏の加護により一切の顛倒の心を滅し、真理の源を早く悟り、速に如来の無上道をなとりたいとの願望を表しているものと思われる。また巻下末には、

源信所撰『往生集』、皆是經論文也。一見一聞之倫、可証无上菩提。須加一倍、広令流布。他日語夢、故作偈曰。
 曰依聖教及正理、勸進衆生、生極樂。
 乃至展轉一聞者、願共速証无上覺。62)

とあって、この往生要集は、經論の文を引用したもので、一度でも見または聞く者をして共に速かに无上覺を証せしめ度いとの意志で書かれたことが記されてある。

了恵の集録した拾遺黒谷上人語燈録巻下、御消息第三に、法然上人のお手紙として、次のようなお言葉が載せてある。即ち、

ま事にわが身のいやしく、わが心のつたなきをばかり見候はず。たれだれもみな人の、弥陀のちかいをたのみて、決定往生のみちに、おもむけしとこそおもひ候へども、人の心さまざまにして、ただ一すぢにゆめまぼろしのうき世ばかりのたのしみさかへをもとめて、すべてのちの世をもしらぬ人も候。又後世をおそるべきことほりをおもいしりて、つとめおこなふ人につきても、かれこれに心をうごかして、一すぢに一行をたのみぬ人も候。又いづれの行にても、もとよりしはじめ、おもひそめつる事をば、いかなることほりをきけども、もとの執心をあらためぬ人も候。又けふはいみじく信をおこして、一すぢにおもむきぬと見ゆる程に、うちすつる人も候。かくのみ候て、ま事しく浄土の一門にいりて、念仏の一行をもはらにする人の、ありがたく候事はわが身ひとつのなげきとこそは、人しれずおもひ候へども、法によりて人によらぬことほりをうしなはぬ程の人も、ありがたき世にて候。おのづからすすめ心み候にも、われからのあなづらはしさに、申しづることほりもすてらるるにこそなんど、おもいしらるる事にてのみ候が、心うくかなしく候て、これゆへはいまひときは、とくとく浄土にむまれて、さとりをひらきてのち、いそぎこの世界に返りきたりて、神通方便をもて、結縁の人をも无缘のものをも、ほむるをもそしるをも、みなことごとく浄土へむかへとらんとちかひをおこしてのみこそ、当時の心をもなぐさむる事にて候に、このおほせこそ、わが心ざしもしるしあるここちして、あまりにうれしく候へ67)。

と、即ち、誰方も弥陀の誓願をたよりとして、弥陀の救いを堅く信じて念仏往生の道を進んで下さい、と思うけれど、人の心はさまざまで、ただ憂世の楽しみや栄耀栄華をのみ求めて未来の世界をも知らぬ人もある。また我が身の罪業の行く末をおそれて、懺悔精進する人の中にも、色

々と道に迷って、専ら称名念仏の一行をたのみとしない人もある。またどの道を行くにしても我執をすてきれぬ人もある。また今日は立派に信心をおこし専らその道を行くかと思うと、道が峻しく途中で挫折する人もあって、眞実浄土の一門に入って念仏の一行を専らにする人はまことに稀で、これはなにも私一人の歎きではないことは知っておりながら、念仏の法が人を救うのであって、人が人を救うのではないという道理を見失わない人も、まことに少い時世であります。自からすすめてはみても、自分のかるがるしさに、云う道理も聞いてもらえないのかと思知らされることばかりであることが、心憂く悲しいことで、この上は、今一際疾く疾く浄土に往生して仏のさとりをひらいて後、いそいでこの娑婆世界に帰ってきて、仏の神通方便をもって、縁のある人もない人も、ほむる人もそしる人も、皆悉く浄土に迎えてとってやろうという誓を發してこそ、今のどうすることも出来ないやるせない心、悲しい心を慰めることでありましょう。そしてこれがそのまま法然上人のお心であると仰せられるのであります。

選択集（下）には、「六波羅蜜經」を引用して、

若復有情、造諸惡業、四重・八重・五無問罪・謗方等經・一闡提等、種種重罪、使不得鎖滅速疾解脫、頓悟涅槃、而為彼說諸陀羅尼藏、總持門、者契經等、中最为第一、能除重罪、令諸衆生解脫生死、速証涅槃安樂、法身⁶³。

とあり、ここで云う陀羅尼とは總持または能持の意⁶⁴。而して「往生ノ教ノ中ニ、念仏三昧ハ是レ總持ノ如シ、亦醍醐ノ如シ。若シ念仏三昧醍醐之藥ニ非ズバ、五逆深重ノ病、甚ダ治シ難シトナス⁶³」とあるによって、念仏三昧の意であろう。されば、諸の惡業を造って生死に苦しんでいる者に、その重罪を消滅し、すみやかに解脫せしめ、即座に涅槃を悟らしむるためには、念仏三昧の教えを説き、この念仏三昧は能く重罪を除き諸の衆生をして生死を解脫せしめ、速かに涅槃安樂の法身を証せしめる、という。

また、法照禪師の「浄土五会法事讚」（卷本）を引用して、

万行之中為急要、迅速無過浄土門。不但本師金口、說十方諸仏共証⁶³。

即ち、浄土門、念仏の教こそが、最も生死の苦海を速かに超える道であり、十方の諸仏も共に伝え証するところであることを明かしている。さらに、

夫速欲離生死、二種勝法中、且闡聖道門、選入浄土門。欲入浄土門、正・雜二行中、且抛諸雜行、選入浄土門。欲入浄土門、正・雜二行中、且抛諸雜行、選入正行。欲修於正行、正・助二業中、猶傍於助業、選入正定。正定之業者、即是称仏名。称名必得生、依仏本願故⁶³。

と、而してこれは、教行信証行卷⁶⁵に引用されてある。

開華院はこれを訳して、初めの「速欲」等の四句は教相章の大意なり、次に「欲入浄土門」等の十句は二行章の大意也。次に「称名必得生依仏本願故」の二句は本願章の大意なり。次に「速欲離生死」等とは、三心章の大意なり。又依仏等と云うは至誠心深信、速欲離生死等は欲生心廻願心なり。

「正信偈」に「速入寂靜無為樂必以信心為能入」とあり。「信心為能入」とは三心章の御積なり。然るに速入と云う速の一字は三心章にない。これは「選択」の一部では総結の文に顯はれた

速の字と、其の速の字を「信心為能入」と一になさったのは三心章の「当知生死」の文を総結の文に合して見よと云う御指南である。故に「尊号真像銘文」末には総結の文の次に当知生死の文を引かれてある。この親鸞の御指南より思いみれば、速欲と指すものは信心であると云うところである。

速の字の裏は遅である。疑う故に迷ったり、又難行道の廻り道をしたり、方便化土の廻り道をししたりして、涅槃城に入ることの遅くなるのは、本願他力の不思議を遅慮する故なり。

故に今速に生死の家を離れて涅槃城に入らんと思はば、弥陀、釈迦の教に信順して、聖道門を捨て、浄土門に入れ、浄土の助業自力を捨てて本願他力の称名に帰せよ。仏の願力によりかかりよりのめば、速に生死の家を離れて凡夫直ちに涅槃城に入り、願土に至れば速に無上涅槃を証るなり、と願はすのがこの文のころである。

故に親鸞、「略本」には大悲の願船には清浄の信心を順風とせよと、弘誓の船に乗じて信心を順風とすれば、速に生死を離れて、直ちに涅槃城に入る。其の速きこと矢の如し。これを「速欲離生死」という。依仏本願故とは王本願也。此の仏の本願の名号には万徳悉く円満具足する故に本願章には名号万徳所帰とある。是れ本願の円の義顯はれている。次に「速欲離生死」と云う。

「速」の字は頓極頓速の義を顯はす。煩惱具足の凡夫願土に至れば速に生死を離れて無上涅槃を証る。衆生の機は万差に分るれども、ただ本願の船に乗じて速かに生死を離れて涅槃城に到ることを得る。本願円頓一乗の義を顯はすために、速欲離生死と書き、初めて依仏本願故と結止し給う。又此の文には、他利々他の深義を相承し給う。其の故は速欲離生死とある速の字は、速得阿耨菩提の速の字を相承する。「論註」の巻末に「速得阿耨菩提」の下に「知生死即是涅槃」との給う。故に出離生死即ち頓証菩提なり。かくの如く、速得阿耨菩提を速欲離生死と受け給い、他利々他の深義を依仏本願故の一句に顯はす。其の「論註」には「速得阿耨菩提故」の「速」の一字について利他故と答えている。利他故とは如来の本願利他故なり。本願利他故を十八、十一、二十二の三願と開いて速かなる所以を答へ給う。

次に文を解するに、「欲離生死」は即ち無上菩提を願う願作仏心なり、願作仏心即ち度衆生心なり。「選応帰正行」とあるは一心に弥陀の帰命する義、「専正定」とは専修を顯はす、一心に本願をたのむ他力信心の義⁶⁵⁾。という。

親鸞聖人は、その著「教行信証」教巻に、

願 速 疾 圓 融 眞 實 教 師 証 也。識 是 如 來 願 土 之 日 記、…… 疾 疾 圓 融 之 旨、……⁶⁸⁾

とあり、開華院によれば、「速疾円融」とは平等覚經に「速疾」の二字出でたり、「円融」の言は「如来会」に「円融兼速」等、大行圓融」とある言を取らせられたもの也。今速疾円融と云うは、十方諸有の衆生が聞其名号の一念に名号の万徳を得て、等覚不退の位に登り、願土に至れば速かに無上涅槃の証りを開く弘願一乗の大利益を速疾円融と云う。「大經」所説の弘願一乗は弥陀の果上より顯はれ出づる一乗究竟の極説、無明法性の名も知らざる凡夫を報土へ往生させる速疾円融の經なり。たとい天台で円頓一乗と云うとも、無明を断ぜねば妙覚の位に至る事能はず。「大經」は無名の名を知らざる凡夫を報土へ往生させて、入一法句弥陀同体の証りを開かしむる速疾一乗の法門なりと讚め給う⁶⁹⁾。と。

また、行巻には、

謹 按 往 相 廻 向、有 大 行、有 大 信。大 行 者、即 稱 无 量 光 如 來、名 斯 行、即 是 誓 諸 著 法、具 諸 德 本、極 速 圓 融、眞 如 一 乘、功 德 宝 海⁷⁰⁾

とあり、開華院は、「極楽円満」とは、聖道の万行は無量劫の修行を経ねば具する事叶はず。今本願の不行は弥陀因位の功德を名号に収めて施し給うが故に、称名の一行に万行万徳一時に具足する故に、極速円満と云う。又其の利益に就て云へば凡夫入報を極速円満と云う⁶⁹⁾。と説明している如く、現在称名念仏の一行に、極速に万行万徳を具足し、また凡夫のまま真実報土に往生出来る故に、極速円満と仰せられたものと解せられる。

また、

如^レ是^ノ人^ニ聞^ク佛^ノ名^一 快^ク安^ク穩^ク得^テ大^ニ利^一 吾^レ等^ノ類^ニ得^テ是^ノ徳^一
 諸^レ此^ノ利^ニ獲^ク所^レ好^ム 无^量覺^ヲ授^ク其^ノ決^一 我^レ前^ニ世^ニ有^リ本^ノ願^一
 一^切人^ノ聞^ク説^ク法^ヲ 皆^ク悉^ク來^ニ生^ス我^ノ國^ニ 吾^レ所^レ願^ス皆^ク具^ス足^一
 從^リ衆^ノ國^ニ來^ニ生^ス者^一 皆^ク悉^ク來^ニ到^リ此^ノ間^一 一^生得^テ不^レ退^ク轉^一
 速^ク疾^ク超^テ便^ク可^ク到^リ安^樂國^ノ之^ノ世^ノ界^一⁷⁰⁾

とあって、開華院は、「速疾超」とは即凡夫入報のことなり⁶⁹⁾と説明している。又、一生得不退転と、今生に不退転を得ることが説かれてある。

また、「依^レ阿^彌陀^經」として、

五^濁修^行多^ク退^ク轉^一 不^レ如^ク念^フ佛^ヲ往^ニ西^方
 到^リ彼^ノ自^然成^ル正^覺 還^レ來^ニ苦^界作^ル津^梁
 万^行之^中為^ス急^要 迅^速无^レ過^ク淨^土門^一⁷⁰⁾

とあり、而して作津梁とは、極楽より還相廻向のとき一切衆生を渡す船ともなり橋ともなる念仏を以て濟度することをいう⁶⁹⁾のであるから、ここで急要といい、迅速というも、その故に衆生の救われることが、万行諸善よりも急要であり、迅速であることを意味している。

また慈雲法師の天竺寺遵式（元照觀經義疏卷上）を引用されて、

唯^ニ安^養淨^業捷^ク真^ニ可^ク修^一。若^シ有^リ四^衆、欲^シ復^ク速^ク破^ク无^明、永^ク滅^ス五^逆・十^惡重^輕等^ノ罪^一、當^レ修^ス此^ノ法^一。⁷⁰⁾

と、ここで速かに無明を破すとは彼土の益であり、安養の淨業即ち弥陀安養の淨土之往生の業因即ち称名念仏が真実のちかみちであることを教えている。

また、

然^レ按^テ本^ノ願^一 乘^レ海^ヲ 円^満足^ク極^ク速^ク无^レ尋^テ絶^對不^レ二^ノ之^ノ教^也。

とあり、これは念仏を諸善に比べての問題であり、諸善に比べ、本願を信じ念仏する道の、さとりに至ることの極速即頓なること等を教えている文章である。

また、正信念仏偈には、

速^ク入^ニ寂^靜无^レ為^ノ樂^一 必^ズ以^テ信^心為^ニ能^ク入^一。⁷¹⁾

とあり、寂靜無為ノ樂とは涅槃界、仏のさとりであり、能入とは涅槃界に入る因であろう。されば、速かに涅槃界に入る因は信心のみであることを示されたもので、信心を問題にしない、素通りしての「速入」ではないのであることに注目すべきであろう。

教行信証信卷（本）には、

大信心者、〃〃〃、趣夷巴謁之白道⁷²⁾、〃〃〃

とあって、遠山諦観も、白道とは善導大師二河譬に曰く「中間に白道四・五寸と云うは、即ち衆生貪瞋煩惱の中に能く清浄願往生心を生ぜしむるに喩るなり」と。清浄願心は即ち廻向の信心にして、この信心名号を聞信する一念極速に、われ等が貪瞋煩惱の迷心中に円かに融け込むを云う⁷³⁾、と云っているが、衆生本願名号を聞信する一念に信心を得ることの極速円融なることをあらわしている。また、華嚴経（普記卷六〇）を引用して、

聞此法、歡喜信心、無疑者、速成无上道、与諸如来等。又言如来能永断一切衆生、疑随其心、所来普皆令満足⁷²⁾

とあり、開華院は、「四十華嚴」の行願品より見れば普賢菩薩善財童子に対して十大願を説きたまふに、後に安樂世界に往生して阿弥陀仏を見奉り大願を満足せんと願いたまう。されば「華嚴」の至極とするところは、偏へに本師阿弥陀如来の普賢願海に帰する。それより見る時は、此の文は全く阿弥陀如来の選択の願意を説き給う経文なり。故に願成就の文によって合するに「聞此法」とは聞其名号なり。「歡喜信心」とは信心歡喜なり。「無疑者」とは乃至一念なり。「速成无上道与諸如来等」とは即得往生なり。故に竜樹はこれを「易行品」に明かして「願如是人念我称名自归即入必定得阿耨多羅三藐三菩提」等といい、天親はこれを浄土論に承けて、「観仏本願力」といい、「速得菩提」とのたまふ⁷⁴⁾。而してこの「即得往生」について、即の字を一般では異時即とみるに反し、親鸞聖人は同時即とみて、時をへだてず、日をへだてず、信の一念に同時に往生すべき利益を得ることと解釈⁷⁵⁾せられているのであるから、この「速=无上道ヲ成ラム、諸ノ如来ト等シトナリ」とは、速かに正定聚不退転の位につくことの「速」であることが知られる。

また信巻（末）には

言横超断四流者、横超者、横者、对竖超、竖出、超者、对迂对廻之言。竖超者、大乘真实之教也。竖出者、大乘権方便之教、一乘・三乘迂廻之教也。横超者、即願成就一実円満之真教、真宗是也。亦復有横出、即三輩・九品・定散之教、化土・懈慢・迂廻之善也。大願清浄、報土、不立品位階次、一念須臾、速疾超証无上正真道。故曰横超也⁷⁶⁾。

とあり、他の教に対して仏果菩提を開くことの速疾なることを明かしている。そしてこれは唯信鈔文意には、

この一心は横超の信心なり。横はよこさまといふ。超はこえてといふ。よろづの法にすぐれてすみやかにとく生死の大海をこえて无上覺にいたるゆへに超とまうすなり⁷⁷⁾。

と、示していられる。

また化身土巻（本）には、

然今時、衆生悉為煩惱、繫縛、未勉惡道生死等、苦。随緣起行一切善根、具速回願往生阿弥陀仏国⁷⁸⁾

とあり、これは往生礼讃偈の一文⁷⁹⁾ではあるが、「一切善根悉皆回、〃〃〃」となっていて速の字はない。この土に於ての自力修善の諸行を止めて、只一筋に速かに他力に帰して往生を願えとの義であらう。また、

夫、濁世、道俗、心速入円修至徳、真門、願難思往生。

と、而して「円修至徳」とは法蔵菩薩があらゆる成仏の因行を円かに修して、尽くこれを一名号に表現し給へるもの、即ち弥陀の名号のこと、「ねがふべし」とは真門に入れ、難思往生を願へと云うもの、一義に曰く、諸行は一隅を守るが故に功を成し難く、称名は万徳を具するが故に益を得易きによる。また一義に曰く、余行は本願の行にあらざるが故に、実に達すること甚だしく念仏は本願の行なるが故に、また果遂の誓いあるが故に弘願に転入するの便あり。これを以て勸む⁸⁰と。故に速かに念仏の真門に入れとのおすすめでありましよう。また、

是以愚禿釈、驚仰論主、解義、依宗師、勸化、久出万行諸善之仮門、永離雙樹林下之往生、回入善本徳本、真門、偏発難思往生之心。然今特出方便、真門、転入、選択、願海、速離難思往生、心欲遂難思議往生、果遂之誓良有由哉⁷⁸。

と、十九の願の諸善万行と違い、共に同じ念仏であるから、真門の念仏、二十願の念仏に帰入すれば、教えなくとも自然に第十八願の真如の門に転入する。即ちいそいで諸善万行の仮門を出て速かに真如の念仏に入り難思議往生を願え、真門の念仏に入りさえすれば果遂の誓ゆえ、遂には第十八願へ転入するとの仰せであります。

浄土文類聚鈔には、

常没、凡夫人、縁願力、廻向開真実、功德、獲无上、信心、則得大慶喜、獲不退転地、不令断煩惱、速証大涅槃矣⁸¹。

とあり、尊号真像銘文には「一念慶喜の真実信よく発すれば、かならず本願の実報土にむまるとしるべし。「不断煩惱得涅槃」といふは、煩惱具足せるわれら、无上大涅槃にいたるなりとしるべし⁸²。」とあり、今生に不退転地をえ、浄土に往生して速かに大涅槃を得る意であります。

愚禿鈔卷上には、

本願一乘海、頓極・頓速・円融・円満之教者、絶対不二之教、一実真如之道也。応知専中之専、頓中之頓、真中之真、円中、円⁸³。


とあって、他力の教こそ、我々凡夫が速に仏となるべき教えであることが説かれてある。

入出二門偈には、

生彼土已速疾得	奢摩他毗婆舍那
巧方便力成就已	入生死菌煩惱林
示応化身遊神通	至教化地利群生
即是名出第五門	入菌林遊戲地門
以本願力、廻向故	利他行成就、応知
无尋光仏因地時	発斯弘誓、建此願
菩薩已成智慧心	成方便心无障心
成就妙樂勝真心	速得成就无上道
成自利利他功德	則是名爲入出門 ⁸⁴

とあって、菩薩、彼の土に生じて速かに仏のさとりを得ること、そして神通方便を以て生死の衆生界に入り群生を利益すること、また法蔵菩薩は速かに无上道を成就して、自利利他の功徳を成就されたことを示している。

また、以上の他、尊号真像銘文、一念多念文意等に、釈文にある「速」の字の説明あるも重複するので省略する。

真言に於ては即身成仏という。併しその真言の高井観海は、「我が宗祖大師は六大体大の文に『相応渉入即是即義』と云い、四曼相大の文に『不離即是即義』と云い、三蜜用大の文に『如常即時即日即身義亦如是』と云う。しかればこの『即』の字は体相用の三大の立場より考えてみる必要がある。成仏の『成』の字を釈するに宥快や杲宝は宗祖大師の大日経開題の大毘盧遮那成仏の『成』の字の釈を挙げ、『』所謂本来成の意味に釈して居る。しかし、この即身成仏の『成』は本来成を出立点なることも可能であり、すみやかに身仏と成ることが出来る訳である。勿論信仰の対象たる已成仏は本来成の仏陀であるが、現実の宗教としての価値はその本覚仏に目覚めて、すみやかに身仏と成ることが何より大切なことである。すみやかに身仏と成る所に実践的意義を認めねばならぬ⁸⁹⁾。』といい、また「古来この即身成仏を三大に約し、体大の時は『即ち身成れる仏』、相大の時は『身に即して仏に成る』、用の時は『^{すみや}即かに身仏に成る』の三訓読み分けをしているのが深い考察を加えた結果であろうと思う⁸⁹⁾』と云っている。

即ち、真言に於ても、体、相の上からは、即ち身成れる仏、とか、身に即して仏に成ると云いながら、すみやかに仏と成る所に実践的意義を認めているのである。

以上、「速」、「速疾」の語について、経論釈を引用し、その義を総括、考按してみると、法蔵菩薩は兆載永劫のご修行成就なされて、自力の他の諸善万行に比して、凡夫成仏の速かなることを成就なされた。

今生に於て、人が人を救うことは出来ないのであるから、一切衆生を済度せんと欲する場合、いそぎ彼の国に往生して成仏することを願え、本願力のゆえに、疾く往生出来、今生には不退転に住することが出来る。浄土に往生せんと願えば現生に念仏して不退の位につくことが大切で、現生に不退の位につくが故に、彼土すみやかに成仏の果を得る。而して臨終の念仏によっても往生出来るが、彼土多劫を経て初めて菩提心を起すとあり、現生不退、平生業成の信心こそ大切である。

正定聚不退の者が道を求むるすがたは外からみると、まわり道のようにはあるが、内心は疾く疾くいそぎの心情である、と。

また安楽集には、生死勤苦の衆生を救おうとして直ちにとびこんでも、力尽き共に溺れるだけであるから、遙かに走り行き大悲の船に乗って、即ち、浄土に生まれてのち、還相廻向によって衆生を済度する、とあるが、私に考えると、深淵に没在する父母眷属を見ながら、遙かに一船舟に走りゆく心境こそ、直ちにとび込む人以上に、疾く、疾くの心情ではないであろうか。即ち安楽浄土に生まれて還相の廻向によって衆生を済度せんとするひとの心情こそ、この世で救わんとする人以上に疾く疾くいそぎの真実切なるものであらうと思われてならない。

法然上人は、速かに生死を離れんと欲わば、本願名号に帰せ、それが仏願に順ずる故に、と仰せられ、また、今生では人を救い得ないので、今一際疾く疾く浄土に往生して仏のさとりをひらいて後、いそいでこの娑婆世界に帰ってきて、仏の神通力をもって皆悉く浄土に迎えとってやろうという期待意志のみが、今生のやるせない気持を慰めることであると仰せられる。

而して親鸞聖人は、この「速かに浄土に生まれたい」の心は信心の意であると受取られ、如来廻向の信心、即ち本願を信じ念仏申すうちに、速かに生死を離れて無上菩提を願う心、即ち願作仏心、即ち度衆生心が極速円満されていると受取られているのである。それは、速疾円融ノ金言極速円満、円修至徳、極速円融などの言葉の上にも顕われているが、速入寂靜无為楽 必以信心為能入とあるごとく、如来廻向の信心なるが故に、速かに寂靜无為の世界に入ることが出来る、と味わわれているのである。

而して、教行信証信巻（本）に、大無量寿経巻下の本願成就文を引用して、

「諸有衆生 聞其名号 一心歡喜 乃至一念 即得往生 住不退転 惟願正定 聚のくらゐに 90」と、而して、一念多念文意にはこの文を釈して、

「諸有衆生」といふは、十方のよろづの衆生とまふすところなり。「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて、うたがふところなきを、聞といふなり。またきくといふは、信心をあらわす御のりなり。「信心歡喜乃至一念」といふは、信心は、如来の御ちかひをききて、うたがふところのなきなり。歡喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり。喜はころによりこぼしむるなり、うべきことをえてむずと、かねてさきよりよろこぶところなり。乃至は、おほきおも、すくなきおも、ちかきおも、さきおも、のちおも、みなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうる時のきわまりをあらわすことばなり。「至心廻向」といふは、至心は眞実といふことばなり、眞実は阿弥陀如来の御ころなり。廻向は、本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。「願生彼国」といふは、願生は、よろづの衆生、本願の報土へむまれむとねがへとなり。彼国は、かのくにといふ、安樂国をおしへたまへるなり。「即得往生」といふは、即はすなわちといふ、ときをへず日おもへだてぬなり、また即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得はうべきことをえたりといふ、眞実信心をうれば、すなわち无尋光仏の御ころのうちに攝取して、すてたまはざるなり。撰はおさめたまふ、取はむかへるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり⁹¹⁾。」といい、「正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり⁹¹⁾と云う。

而して末灯鈔には、「釈迦如来・弥陀仏、われらが慈悲の父母にて、さまざまの方便にて、われらが^{むじよう}無上の信心をばひらきおこさせたまふと候へば、まことの信心のさだまることは、釈迦・弥陀の御はからひとみえてさふらふ。往生の心うたがひなくなりさふらふは、攝取せられまいらせたるゆへとみえて候。攝取のうへには、ともかくも行者のはからひあるべからず候。浄土へ往生するまでは不退のくらゐにておはしましきさふらへば、正定聚のくらゐとなづけておはしますことにてさふらふなり。まことの信心をば、釈迦如来・弥陀如来二尊の御はからひにて発起せしめたまひ候とみえて候へば、信心のさだまるとまふすは攝取にあづかることにてさふらふなり。そののちは正定聚のくらゐにて、まことに浄土へむまるるまでは候べしとみえ候なり。ともかくも行者のはからひちりばかりもあるべからず候へばこそ、他力とまふすことにて候へ⁸⁸⁾。」とあって、弥陀の本願を信じ、信心のさだまったものは、行者のはからひはちりほども必要ない。而して眞実信心を得れば、正定聚不退の位につくことであり、されば「念仏していそぎ仏になりて」の「念仏して」は、ただ「念仏申す」信心の生活、正定聚不退転の生活のうちに、「いそぎ仏になりて思うが如く衆生を利益する」心情も、からくりも極速円満に成就されてあったのであり、即ち「しかれば念仏まうすのみぞすゑとおりにたる大慈悲心」であったのであります。

第3章 顕 真 実

ここに「ただ念仏」するとは、正信偈の、

唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩、

の「唯能ク常ニ如来ノ号ヲ称』することであり、浄土和讃の、

弥陀の名号となへつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもひあり⁹²⁾

の『弥陀の名号とな』えることで、念仏は如来の絶対救済の名告りであり、如来の大悲の招換である。この如来の大悲真実が領納されたとき、衆生にとってはただ念仏が報恩行となるのである。

称名が報恩行となる理由については、古来より上讃仏徳、下化衆生の徳があるからだと言われているが、上讃仏徳とは称名が仏徳讃嘆をすることになる意で、このことは称名が讃嘆門中の略讃であるに徴しても無理なく理解せられる。宗祖が『尊号真像銘文』に、「称仏六字』といふは、南无阿弥陀仏の六字をとらふるとなり。「即嘆仏』といふは、すなわち南无阿弥陀仏をとらふるはほめたてまつることばになるとなり。下化衆生とは、現生十益中に説かれる常行大悲に相当するのであって、これは仏名を称することが、仏の大悲を十方に伝えることになるという意味である。真実に仏恩を感戴し、称名もろもろの生活をする人の行為を見聞するとき、自ら他のひとびとをして仏の大悲に目ざめしむることは疑うことは出来ぬ。和讃に、

無慚無愧のこの身にて

まことのころはなけれども

弥陀廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

染香人のその身には

香氣あるが如くなり

これをすなはち名づけてぞ

香光莊嚴とまふすなり

とはこの風光であると考えられる。而して仏徳讃嘆と常行大悲とは相即の関係にあるもので、仏徳を讃嘆することによりて大悲を行ずることが出来るのであり、大悲を行ずることによって、仏徳を讃嘆することが出来るという。⁹³⁾

これはまた、教行信証信巻末に、

大悲經云云何名爲大悲若專念仏相續不斷者隨其命終定生安樂若展轉相勸行念仏者此等悉名行大悲人抄出⁷⁶⁾

とあって、信後相續の行に自ら常行大悲の益あることを明かしてあり、吾が身に称うる念仏を人にも相勸め、信を得た有難さに称うる称名が、知らず識らず自然に他の人にも聞かせて信をとらしむることになるであろう。

ところが笠原一男は、往相廻向から還相廻向への転化の時点について親鸞は、一応死によって

完成する成仏、そして死後再びこの世にかえってきての衆生の救済という立場をとっている。しかし現実における念仏の救済活動は生きたままの信心決定の念仏者の布教活動という形でおこなわれるのである。念仏者を念仏布教にかりたて、念仏者の念仏布教を支える論理は還相廻向の論理であったといえる。還相廻向が肉体的な死、真の成仏の後、弥陀のはからいによって実現されるというのであれば、現実社会における念仏者の布教を支える論理とはなり切れないといえよう。だが信心決定の人は、この世で弥勒仏、阿弥陀仏と殆んど等同の境地におかれており、真に成仏するのはただ時間を待つ、死の時期をまつといったものであった。念仏による救いは、この世における生身の体での成仏ともいえるものであった。それは他力によるという前提にたつての即身成仏ギリギリの線までいっていたのである。そこに死後において、真の成仏後において可能であるはずの還相廻向が生前の念仏布教を支える論理となりえたといえよう。⁹⁴⁾と云っているが、

教行信証信卷(本)には、「又言回向者、生彼国已、還起大悲、回入生死、教化衆生、亦名回向也。⁹⁵⁾とあり、また証卷には、

夫案真宗教・行・信・証者、如来大悲回向之利益。故若因若果、无有一事、非阿弥陀如来、清淨願心之所回向成就。因淨故、果亦淨也。応知、一還相回向者、則是利他教化地、益也。則是出於必至補処之願、亦名一生補処之願、亦可名還相回向之願也。願註論、故不出願文、可披論註。⁹⁶⁾

とあり、また『論註』の文を引用して、

『論註』(卷下)曰。「還相者、生彼土已、得著摩他毗婆舍那方便力成就、回入生死稠林、教化一切衆生、共向仏道、若往若還、皆為拔衆生渡生死海。是故、言回向為首得成就大悲心故。⁹⁶⁾

とあって、「彼ノ国ニ生ジ已テ」或は「彼ノ土ニ生ジ已テ」とあり、また「若ハ因若ハ果、一事トシテ阿弥陀如来ノ清淨願心ノ回向成就シタマヘルトコロニ非ルコト有ルコト無シ」、或は「若ハ往若ハ還、皆衆生(ノ苦)ヲ抜イテ生死海ヲ渡セムガタメナリ。是ノ故ニ、回向ヲ首トシテ大悲心ヲ成就スルコトヲ得ルガ故ニ言タマヘリ」とあって、彼の土に生じた者の発す大悲心であって、全く此土の凡情でないことは明らかである。

大原も、信後還相説或は此土還相説の異安心であることを説き、還相門は往相門所対のものであるけれども証以外のものではなく、親鸞聖人も教行信証の証卷に開示されてあって、別巻とせられてはいない。還相廻向は証の本質たる滅度体上の妙用に外ならないからである、と。また諸仏等同、便同弥勒はこの世で凡夫の身が等しいのではなく、心が等しいのであると垂誡されたものであり、撰取不捨と心光撰護の現実的救済の体感であるとのべている⁹⁷⁾。

また森竜吉、赤松俊秀⁹⁸⁾、松野純孝⁹⁹⁾らは、諸仏等同がその消息で強調されたのは、善鸞が義絶された建長八年の前年、異解の問題で教団が動揺している最中で、力点が造悪無碍の制誡から諸仏等同の強調に移ったことを認めている。これに関する消息も建長七年から正嘉二年にかけてのものともみて誤りなく、この諸仏等同の論拠になっているのは、涅槃経、華嚴経であり、これは教行信証信卷で明らかにされていて、なおこの部分は宿紙なので、寛元～建長のころに書き直されている、という。而して、赤松は、正嘉元年十月十日に性信と真仏に、真仏にはまた十月六日附の末灯抄第13通の消息を送って、重ねて信心の定まるのは仏の計らいで、行者の計らいでない

ことを強調し、正嘉二年十二月十四日の自然法爾の法語にも行者の計らいを否定している。

ところがこの親鸞聖人の真意を真に理解出来ない近時の学者や信者は、ただ異安心と云われることをおそれてか、あまりにも消極的な真宗門徒の姿を悲歎するあまり、聖人のご意志に反する論説が跡を絶たない。

普賢大円は、法徳顕現について、信心歓喜の心より任運無作に流出する行為のみが真宗の報恩行として認められるのであって、何等かの期待意志をもってする作意の報恩行は報恩行に非ずというならば、それはあまりにも極端な論議であると思う。報謝行は任運放恣に一任して、粉骨碎身の努力奮励を斥けなければならぬとするから、ここに真宗の報恩行は萎靡沈滞し、その積極性は全く失われることになる。善導大師は定善義に、

不_レ計_レ功_レ徳_レ 念_レ 願_レ 誓_レ 願_レ 若_レ 得_レ 一_レ 人_レ 捨_レ 捨_レ 出_レ 生_レ 死_レ 者_レ 是_レ 名_レ 眞_レ 報_レ 仏_レ 恩_レ?

とあり、また往生礼讃に、

自_レ 信_レ 教_レ 人_レ 信_レ 難_レ 中_レ 転_レ 更_レ 難_レ 大_レ 悲_レ 伝_レ 普_レ 化_レ 眞_レ 成_レ 報_レ 仏_レ 恩_レ?

とあり、これは、教行信証信巻にも化巻にも引用されており、また親鸞が和讃に、

仏慧功德をほめしめて

十方の有縁にきかしめん

信心すでにえん人は

つねに仏恩報ずべし

他力の信をえん人は

仏恩報ぜんためにとて

如来二種の廻向を

十方にひとしくひろむべし

というているが如き、どうみても任運無作に出づる報恩行ではなく、期待意志より努力精進してなされる常行大悲の報恩行と考えねばならぬ。而して作意より出づる行為までも、他力によって「なさしめられたるもの」として認められている、と云う。

また彼は、親鸞の社会的人間像として、顕真実と同朋愛をあげている。

しかし、これらが、期待意志より努力精進してなされるものとの考えには同調出来ないし、勿論、信後此の世に於て既に還相廻向が出来るとする考えにも私は同調出来ない。眞の布教活動は信心の徳として自然におこなわれるものであると考えられるが、この布教活動こそ、顕真実なのである。

親鸞は、この顕真実の一生であったとって過言ではなく、その大著、教行信証は「顕浄土真実教行証文類」と名づけられているをみてもわかるが、明治九年十一月二十八日、見真大師の勅諭号が宣下されたことは、至極もったもなことである。

しからば念仏者の積極的な布教を支える理論、そういうものがあるかどうかは解らぬが、信心の行者、念仏者が自然に、大悲真実をあらゆる人々に伝えたいという活動は如何なる原理、動機機縁にもとづくものであろうか。今少しくそれについて卑見を述べて、諸賢のご高見をうかがいたいと思う。

第4章 一生之間能莊嚴

本願寺聖人伝絵（覚如）東本願寺本上ノ第三段に、

建仁三年^{辛酉}四月五日夜寅時、聖人夢想の告ましましき、彼記にいはいく、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して白衲の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂^々 救世菩薩善信にのたまはく、此是我誓願也、善信この誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむべしと云々 爾時、夢中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば峨々たる岳山あり、その高山に、数千万億の有情群集せりとみゆ、そのとき告命のごとく、此文のころを、かの山にあつまれる有情に対して、説ききかしめをはるとおぼえて、夢悟をはりぬと^{云々} 倩此記録を披て彼夢を案ずるに、ひとへに真宗繁昌の奇瑞、念仏弘興の表示也、然者、聖人、後時、おほせられてのたまはく、仏教むかし西天より興て、経論いま東土に伝る、是偏に、上宮太子の広徳、山よりもたかく海よりもふかし、吾朝欽明天皇の御宇に、これをわたされしによりて、すなわち浄土の正依経論等、此時に来至す、儲君もし厚恩をほどこしたまはずは、凡愚いかでか弘誓にあふことを得ん、救世菩薩はすなはち儲君の本地なれば、垂迹興法の願をあらはさんがために、本地の尊容をしめすところなり、抑又、大師聖人^{源空}もし流刑に処せられたまはずは、われ又配所に赴かむやもしわれ配所におもむかずは、何によりてか辺鄙の群類を化せむ、これ猶師教の恩致なり、大師聖人すなはち勢至の化身、太子また観音の垂迹なり、このゆへにわれ二菩薩の引導に順じて如来の本願をひろむるにあり、真宗因茲興し、念仏由斯煽也 是併聖者の教誨によりて、更に愚昧の今案をかまへず、かの二大士の重願、ただ一仏名を専念するにたれり、いまの行者、あやまりて脇士に仕ることなかれ、ただちに本仏をあふぐべしと云々かるがゆへに聖人^{親鸞}かたわらに皇太子を崇たまふ、蓋斯、仏法弘通の浩なる恩を謝せむがためなり⁹⁹、

とあり、真仏上人書写本で、三重県高田派専修寺蔵⁹⁹)にも聖人夢想の告げがあって、本記の書写年代は明記せられてはいないが、高田真仏上人が、正嘉二年に五十才を以って歿したと伝えられるので、従ってその書写の下限は右の年であり、時に親鸞聖人は八十六才、即ちその在世中であり、「親鸞夢記云」とあるところよりみれば、「親鸞夢記」なる原本があったに相違ない⁹⁹。

而して、救世菩薩の夢のお告げのうち、臨終に引導して極樂に生ぜしめるということはわかるが、「一生ノ間能ク莊嚴シテ」の語は如何なる意義を物語っているのだろうか。

而してこの莊嚴の語について、大智度論卷第十には、「爾の時に、是の三千大千世界は、皆變成して宝華と為り、遍ねく地を覆ひ、繪旛蓋を懸け香樹・華樹皆悉く莊嚴す。」と经文にあるを釈して、「問うて曰く、此れは誰の神力が、地をして宝と為らしむるや、答へて曰く、是れ仏の無量の神力変化の所為なり。人の呪術、幻法及び諸の鬼神・竜王・諸天等は能く少物を変化すること有れども、三千大千世界をして皆珍宝と為らしむることは、余人及び梵天王の皆能はざる所なり。仏は四禪の中の十四變化心に入り、能く三千大千世界の華香・樹木・一切の土地をして皆悉く莊嚴ならしめたまひ、一切衆生は皆な悉く和同し心転じて善を為す。

何を以っての故に、此の世界を莊嚴するや。般若波羅蜜を説かんが為の故に、亦た十方の諸の菩薩の客来ると、及び諸天と世人との為の故に莊嚴す。人の貴客を請ずるときの如し。若し一家が請ずれば則ち一家を莊嚴し、一国の主は則ち一国を莊嚴し、轉輪聖王は則ち四天下を莊嚴し、梵天王は三千大千世界を莊嚴す。仏は十方無量恒河沙等の諸の世界中の主たり。是の諸の他方の菩薩及び諸天、世人が客来するが為の故になり。亦た此と彼の衆人の為に此の變化の莊嚴を見せば則ち大心を生じ、清浄なる歡喜心を生じ、大心に従て大業を發し、大業に従て大報を得。大報を受くる時、更に大心を生じ、是の如く展轉増益して、阿耨多羅三藐三菩提を生ずることを得。是を以っての故に此の世界を変じて皆悉く宝と為す¹⁰⁰。」とあり、また「是の宝に三種あり、人宝

と天宝と菩薩宝となり。人宝は力少なく、唯清浄なる光色ありて、毒を除き、鬼を除き、闇を除き、亦飢渴、寒熱、種々の苦事を除く。天宝は亦た大にてもあり、亦た勝れたるものにもあり常に天身に墮逐し、使は令すべく、共に語る可く、軽くして重からず。菩薩宝は天宝よりも勝れ能く人宝、天宝の事を兼ね有てり。又能く一切衆生をして、此に死し彼に生ずる因縁の本末を知らしむること。譬へば明鏡にむかて、其面像を見るが如し。復次に、菩薩宝は勝れて能く種々の法音を出す。若し首飾・宝冠と為れば、則ち十方の無量の世界の諸仏の上に、幢旛、華蓋、種々の供養の具を雨ふらして以て仏に供養し、又衣被、臥具、生活の物を雨らし、種々の衆事衆生の須ゆる所に随って、皆悉く之を雨らして衆生に給施す。是の如き等の種々の衆宝ありて以て衆生の貧窮苦厄を除く¹⁰⁰⁾。」という。また卷四には、「問うて曰く、菩薩は何を以ての故に相を以て身を蔽^{かざ}るや。答へて曰く、人、仏の身相を見たてまつらば、心に淨信を得る有り、是を以ての故に相を以て身を蔽りたまふ。復次に、諸仏は一切の事勝るるを以ての故に、身色・威力・種姓・家屬・智慧・禪定・解脱の衆の事みな勝れたり。若し仏、身相を莊蔽したまはずんば、是の事便ち少し。復次に有人は言ふ阿耨多羅三藐三菩提は是の身の中に住す。若し身相、蔽ならざれば、阿耨多羅三藐三菩提は此の身中に住せずと。譬へば人の豪貴の家の女を娶らんと欲するが如し。其の女使を遣はして、彼の人に語げて言く、『若し我を娶らんと欲せば、当に先ず房室を莊蔽し、汚穢を除却し、香薫を塗治し、華香をもて必ず蔽飾せしむべし。然る後我当に汝が舎に到るべし』と。阿耨多羅三藐三菩提も亦復是の如し。智慧の使を遣はして、未來世の中の菩薩の所に到って言く、『若し我を得んと欲せば、先ず相好を修め、以て自ら莊蔽せよ。然る後我当に汝が身中に住すべし。若し身を莊蔽せずんば我は住せざるなり』と。是を以ての故に菩薩は三十二相を修して自ら身を莊蔽す。阿耨多羅三藐三菩提を得んが為の故なり¹⁰⁰⁾。」とあり、また卷四十五、第十五大莊蔽品には、「説く所の摩訶薩の義とは、所謂、是れ人の大莊蔽なり。人の遠く行くに重く資糧有るが如く、又た賊を破するに、諸の器杖を備ふるが如し。是の菩薩も亦た是の如く、魔人、煩惱賊を破せんと欲するが故に、六波羅蜜を行じて、以て自ら莊蔽す。是の人は無量劫より來、久しく生死に住して、諸の福德智慧を集め、以て資糧と為し、三種の乗中、大乘に趣かんが為の故に、発心して六波羅蜜を行じ、是の大乘に乗ぜり。菩薩は是の莊蔽を作し、一切の衆生をして、尽く大乘に入って仏と作らしむ。菩薩は大莊蔽を行じて自ら檀波羅蜜を行じ、亦た一切の衆生をして檀波羅蜜を行ぜしむ。乃至、般若波羅蜜も亦た是の如し。問うて曰く、云何なるを大莊蔽と名くるや。答へて曰く衆生を度せんが為の故に、阿耨多羅三藐三菩提の為の故に、諸の善福功德を行ずる者なり。略して是を説かば、六波羅蜜なり。若し菩薩、一切智慧の為の故に、檀波羅蜜を行ぜば、是の福德は一切衆生と共なり。「共なり」とは、此の布施の福德、我と及び衆生と共等なるなり。我は此を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。「廻向」とは、此の福德に於いて、人王、天王、世間の禪定の樂を求めず。衆生、乃至涅槃の為にも亦た此の果報を持せんことを求めず、尽く衆生を度せんが為の故に、仏法を求むるなり。是の如き等の相、是を檀波羅蜜の大莊蔽と名く。問うて曰く、富樓那は、何を以ての故に、一の波羅蜜の中に、諸の波羅蜜を生ずるをば、大莊蔽と為すと説きしや。答へて曰く、是の波羅蜜は、各別に行ずれば力勢少し。十方の諸仏の名を稱へ、讚嘆し、衆生を成就し、仏世界を淨むることは、先に説けるが如し¹⁰¹⁾。」とあり、同卷第四十六には、「問うて曰く、六波羅蜜の外、更に何の法ありてか莊蔽すべきや。答へて曰く、諸の功德は皆な六波羅蜜の中に摂す。有人の言く、『別に智波羅蜜及び方便等有り』と。十方恒河沙等の世界の中に於いて、応に度すべき所に随って、種々の因縁を作し、法を説きて衆生をして六波羅蜜に住せしむ。復次に、決定誓願を名けて、大莊蔽と為す¹⁰¹⁾。」とある。

無著菩薩の大乗莊嚴經論，緣起品第一に，偈曰，

義智作諸義 言句皆無垢。救濟苦衆生
慈悲為性故。巧說方便法 所謂最上乘。
為發大心者 略以五義現。

釈曰、莊嚴大乘經論誰能莊嚴。答、義智能莊嚴。問、義智云何莊嚴。答、開作諸義。問、以何開作。答、以言及句。問、以何等言、以何等句。答、以無垢言、以無垢句。無垢言者、謂能至涅槃無垢句者、謂字句相應。若離無垢言句、則於諸義不能開曉。問、以何義故莊嚴。答、為救濟苦衆生故。問、衆生自苦、何因救濟。答、為菩薩者大悲為體、生憐愍故。問、若救他苦、莊嚴何法。答、莊嚴如來巧說方便法。問、何等方便法。答、所謂最上乘。問、為誰故莊嚴。答、為發大心者。、問、若彼法自性功德具足、何義更須莊嚴為。答此問、偈曰、

譬如莊美質 臨鏡生勝喜、
妙法莊嚴已 得喜更第一。

釈曰、譬如美質加莊像現於鏡、則生勝喜。何以故、為有悅故。菩薩亦爾。莊嚴妙法義入自心、則生勝喜。何以故、為有聞故¹⁰²⁾。

とあり、即ち、大乘經を莊嚴する論について、誰がよく莊嚴するのかといえ、義をよく知っている者が莊嚴するのである。その莊嚴というのは如何なる莊嚴かといえ、無垢なる言葉、無垢なる文章を以て義を明らかにすることであり、無垢なる言葉はよく涅槃に導びき入れ、無垢なる文章とは、適切なる文章であって、若しこの無垢なる言葉や文章を離れては、義を明らかにすることは不可能である。この世の人々はみづから求めて苦しんでいるのではあるが、菩薩は大悲を体として、苦しんでいる人々を憐愍するが故に、苦悩の人々を救済せずにはおれないのである。如來は巧みな說法により、最上の教により、大乘に赴く衆生のために莊嚴するのである。若し彼の法が本来功德を具足しているなら、何故さらに莊嚴せられるのであろうか、という疑問を持つであろうが、それに答えて、たとえば本来美しいものが鏡に映っている姿をみると、すぐれたよろこびを生ずる如く、すぐれた法が莊嚴されて、恰かも像が莊飾によって本性上勝徳を有する如くになり、鏡に映ったのを見ることによって、優れた歡喜を起こすが如く、此の如くに彼法も、本性上常に勝徳を具足して居ても、善説によって、其義が分別せられたものは、優れた満足を生ずる。覺を有する人々には此の故に優れた満足を生ずるが故に莊嚴せられたが如くになると云われる。

宇井伯壽は、大乘修多羅莊嚴論は、梵語で Mahāyānasūtrālakāra で、Sūtrālakāra は經莊嚴又は莊嚴經、即ち經の莊嚴、經を莊嚴することの意味であるべきことは、瑜伽論第六十四卷に 經莊嚴 及 莊嚴經 與 莊嚴經 同 與 莊嚴經 同 とあるに拠って明らかであり、莊嚴は飾ることをいうには相違ないが、ここでは、如來所説の經の義を如實に開示するを指す。講讚讚揚など用うるのも同じ意味のつもりであろう。大乘經の莊嚴、大乘經によつての莊嚴の意味である。梵文に義を明らかにすること arthavibhāvanā とあるのが即ち莊嚴に当るのである¹⁰²⁾、と云っている。

親鸞聖人はその著、教行信証の行卷に「論註」（卷上）を引用して、

釈迦牟尼仏在王舍城及舍衛國於大衆之中說无量壽仏莊嚴功德。即以仏名号為經。¹⁰³⁾

と、即ち莊嚴功德というのは本願成就の三種莊嚴二十九種であつて、その二十九種を合すれば、ただ其の本体は弥陀の名号より他はないことを示され、また、

一者從菩薩智慧清淨業起莊嚴仏事。依法性入清淨相。是法不顛倒。

不_レ虚_レ偽_レ、名_レ真_レ実、功_レ徳_一103)

とあって、法蔵菩薩の清浄なる智慧の業から浄土の莊嚴を成就し、衆生済度の御仕事をなし給う功德は、真如法性の理にかなって清浄であり、少しも顛倒でなく、虚偽でないので真実功德と名づける、という。また、

『浄土論』(卷論註)曰。「何_レ者_レ莊嚴不_レ虚_レ作_レ住持功徳成就。偈_レ言_レ「_レ觀_レ二_レ仏_レ本願力_一、_レ遇_レ无_レ空_レ過_レ者_一、能_レ令_レ速_レ滿_レ足_レ功徳、大_レ宝_レ海_一故_一。不_レ虚_レ作_レ住持功徳成就者、蓋_レ是_レ阿_レ弥_レ陀_レ如_レ來、本_レ願_レ力_一也。今_レ當_レ略_レ示_レ虚_レ空_レ之_レ相_一不_レ能_レ住_レ持_一、用_レ顯_レ彼_レ不_レ虚_レ作_レ住持之_レ義_一。至_レ所_レ言_レ不_レ虚_レ作_レ住持者、依_レ本_レ法_レ藏_レ菩_レ薩、四_レ十_レ八_レ願_一。今_レ日_レ阿_レ弥_レ陀_レ如_レ來、自_レ在_レ神_レ力_一願_レ以_レ成_レ力_一、力_レ以_レ就_レ願_一。願_レ不_レ徒_レ然_一、力_レ不_レ虚_レ設_一。力_レ願_レ相_レ府_レ畢_レ竟_レ不_レ差_レ、故_レ曰_レ成_レ就_一」44)

とあって、不虚作住持功德成就という莊嚴について、「論註」の文を引用して、それは阿弥陀如来の本願力である、と云い、また「一念多念文意」には、「功德」とまふすは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功德みちきわまるを海にたとへたまふ、この功德をよく信ずるひとのこのころのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめむとなり。しかれば金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに大宝海とたとえたるなり45)。とあって、よろづの善根みちきわまる名号であって、本願を信ずる人の心にその善根功德がみちみつことが説かれてある。光遠院は113)、「能莊嚴」とは、[大經云以大莊嚴]外護ト成テ一形給仕スベシト也。即福智ニ莊嚴ニ通ズ可シ。と云い、この「以大莊嚴」の大經の文はまた信卷三問答の箇所に引用されてある。即ち、

是_レ以_レ「大_レ經_一」(卷下)言_レ「_レ、_レ、_レ和_レ顏_レ愛_レ語_一、先_レ意_レ承_レ問_一、勇_レ猛_レ精_レ進_一、志_レ願_レ无_レ倦_一。專_レ求_レ清_レ白_レ之_レ法_一、以_レ惠_レ利_レ群_レ生_一、恭_レ敬_レ三_レ宝_一、奉_レ事_レ師_レ長_一。以_レ大_レ莊_レ嚴_一具_レ足_レ衆_レ行_一、令_レ諸_レ衆_レ生_レ功_レ徳_レ成_レ就_一」上とあり、祐原114)も、この大莊嚴は恭敬三宝、奉事師長の福智ニ莊嚴であると云っている。

また「無量寿如来会」(卷上)の文を引用して、

仏_レ告_レ阿_レ難_一。彼_レ法_レ処_レ比_レ丘_一、_レ、_レ、_レ広_レ發_レ如_レ是_レ大_レ弘_レ誓_一、皆_レ已_レ成_レ就_一。世_レ間_レ希_レ有_一、發_レ是_レ願_一已_レ、如_レ實_レ安_レ住_一、種_レ種_レ功_レ徳_レ具_レ足_一、莊_レ嚴_レ威_レ徳_レ広_レ大_レ清_レ浄_レ仏_レ土_一104)

とあって、衆生を遣え入れるためその仏土を種々の功德で莊嚴(かびりたてる)したことが説かれてある。

また論註卷下を引用されて、

淨_レ入_レ願_レ心_レ者_一、論_レ曰_一、又_レ向_レ說_レ觀_レ察_レ莊_レ嚴_レ仏_レ土_レ功_レ徳_レ成_レ就_一・莊_レ嚴_レ菩_レ薩_レ功_レ徳_レ成_レ就_一・此_レ三_レ種_レ成_レ就_一、願_レ心_レ莊_レ嚴_一、應_レ知_一。應_レ知_レ者_一、應_レ知_レ此_レ三_レ種_レ莊_レ嚴_レ成_レ就_一、由_レ本_レ四_レ十_レ八_レ願_一等_一清_レ浄_レ願_レ心_レ之_レ所_一莊_レ嚴_一、因_レ淨_レ故_レ果_レ淨_一、非_レ无_レ因_一、因_レ有_レ也_一105)。

とあって、極楽浄土の三種莊嚴は四十八願の清浄なる願心によって莊嚴(かびりたてる)されたもので、因である願心が清浄であるから、その結果として成就された極楽浄土の三種莊嚴も清浄であるという。

歎異鈔第四章の「しかれば念仏まふすのみぞ」の意義についての一考察

また、

爾時世尊讚阿闍世王善哉善哉若有人能發菩提心當知是人則為莊嚴諸仏大衆¹⁰⁴

とあって、この「菩提心」は、この文章の前に「我今始メテ伊蘭子ヨリ梅檀樹ヲ生ズルヲミル、伊蘭子ハ我ガ身是ナリ。梅檀樹ハ即チ是レ我ガ心ノ無根ノ信ナリ」とあるところから、この無根の信、即ち他力の信心であり、他力の信心を得る者は、諸の衆生の悪心を破壊し、阿耨多羅三藐三菩提心（他力の信心）を發せしめるので、諸の衆生を莊嚴する、というのであろう。

また証卷に浄土論註巻下の文を引用して、莊嚴妙声功德成就¹⁰⁵とは若し人ただ極楽浄土の清浄安樂なるを聞いて剋念して生まれんと願うものは往生を得、この世では正定聚の位につかきめるので、極楽浄土の名声が衆生救済の仏事をなすことであるといい、莊嚴主功德成就¹⁰⁵とは彼の安樂浄土は正覺の阿弥陀の仏力によって住持せられ、一度安樂浄土に生まれた後に三界に還つて衆生を教化せんとする時も、三界の雜生の火の中にあつても無上菩提の種子朽ちないのは仏力に住持されているからだという。莊嚴眷屬功德成就¹⁰⁵とは、かのお浄土の人々は皆阿弥陀如来の正覺の華の中より化生し給うので、それで如来の浄華衆と呼ばれるという。また莊嚴清浄功德成就¹⁰⁵とは煩惱成就の凡夫人彼の浄土に往生すれば三界の繫業も牽くことなし、則ち煩惱を断ぜずして涅槃を得ることを云うと。

また定善義の文を引用して、

西方寂靜无為樂、畢竟逍遙離有無、大悲熏心遊法界、分身利物等无殊、或現神通而說法、或現相好入无余、變現莊嚴隨意出、群生見者罪皆除¹⁰⁵。

とあり、寂靜無為の樂即ち涅槃界の徳を開示し、思いのままに種々の莊嚴を變じ出して、衆生これを見るものをして罪惡生死を離れしむることを明らかにしてある。

また、

觀菩薩者、云何觀察菩薩莊嚴功德成就。觀察菩薩莊嚴功德成就一名觀彼菩薩、有四種正修功德成就。應知真如是諸法正體、體如而行則是不行。不行而行名如實修行、體唯一如而義分為四¹⁰⁵。

と、以下正しく還相菩薩の莊嚴功德である利他の應用を明してあり、法性の証りからおのずと起る活動で、以下にその四種を詳述してあるが、これを略論すれば、

(1) 不動徧至の徳。これは身を動かさずして十方の諸仏を供養し、衆生を化益して暫くも休息する時はない。この不斷の活動、不斷の進轉が菩薩の生活である。そして泥中に蓮華を生ずる喩を出して、煩惱具足の凡夫が還相の菩薩のために導びかれて、正覺の華、他力の信心を開かきめることを積せられてある。

(2) 一念普生の徳。これは一念に十方に至って化益を施す、という。

(3) 無余供養の徳。即ち下衆生を化益するとともに、どこまでも上菩提を求めるのである。肇公の言とは、『註維摩』の序文である。「法身無像」等は身業、「至韻無言」等は口業、「冥権無謀」等は上を結んだ言葉である。此の文の初めに「夫れ聖知は無知にして、而して万品俱に生ず」という意業の文を略してあり、総じて還相菩薩の化益を三業に順じて示されたものである¹⁰⁶、と。

(4) 無仏世界の伝導。還相の菩薩は単に仏法流布の国ばかりではなく、常に仏教が流布されていない国に向っても三宝を宣伝することを怠らない。ここに生々澆刺たる清新の活動があり、不断の希望がある¹⁰⁶⁾。と。

次いで、信巻に前掲した「論註」(巻下)の淨入願心の相を示す文を引用し、淨土の三種莊嚴は法藏菩薩の願心より成就したことが示されてある。次いで、

略説三人一法句故。上国土莊嚴十七句、如来莊嚴八句、菩薩莊嚴四句、為略。入一法句者、為略¹⁰⁵⁾。

とあり、一法句と三種莊嚴の相入の理を示し、上来淨土の三種二十九種莊嚴を廣説したが、それはただ一法句、即ち真如に攝まると。次いで、この一法句は清淨句であり、清淨句というのは眞実ノ智慧無為法身ナルガ故ニトノタマヘリ、と。而して法身ハ無相であり、無相ノ故ニ能ク相ナラザルコトナン、是ノ故ニ相好莊嚴即チ法身ナリと。次いで、この清淨に二種あり、一は器世間清淨、二は衆生世間清淨で、一法句に二種の清淨の義がある¹⁰⁵⁾という。

善巧攝化者、即ち還相の菩薩は実相ヲ知ルヲ以テノ故ニ、則チ三界ノ衆生ノ虚妄ノ相ヲ知り、衆生ノ虚妄ヲ知レバ則チ眞実ノ慈悲ヲ生ズル。眞実ノ法身ヲ知レバ則チ眞実ノ歸依ヲ起ス、と。而して菩薩の巧方便回向とは、礼拝等の五種の修行を云い、集めるところの功德善根は自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、作願して一切衆生を攝取して、共に同じく安樂仏國に生ぜしめることを云うと。而して、

案王舎城所説、无量寿經、三輩生中、雖行有優劣、莫不發誓、无上菩提之心。此、无上菩提心、即是願作仏心、願作仏心、即是度衆生心、度衆生心、即是攝取衆生、生有仏、国土心、是、故願生彼、安樂淨土者、要發无上菩提心也。若人、不發无上菩提心、但聞彼、国土、受樂無間、為樂、故願生、亦當不得往生也。是、故言不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦、故住持樂者、謂彼、安樂淨土、為阿彌陀如来、本願力之所住持、受樂無間也。凡稱回向、名義、謂以己所集一切功德、施与一切衆生、共向、仏道。巧方便者、謂菩薩願、以己智慧、火燒一切衆生煩惱、草木、若有一衆生、不成仏、我不作仏。而衆生未、尽成仏、菩薩已自成仏、譬如火、燒一切、欲下、一切、草木、燒令、使尽、草木未、尽、火、燒已、尽。以後、其身、而身先、故、名、方便。此、中言、方便者、謂作願、攝取一切衆生、共同生彼、安樂仏國。彼、仏國、即是畢竟成仏、道路、无上方便也¹⁰⁵⁾。

と、巧方便とは、自分の智慧の火で、すべての衆生の煩惱の草木を焼き尽くそうと発願し、一人の衆生でも成仏しないうちは、自分も仏とはならないと誓われたが、衆生全体が成仏しない中に菩薩自ら成仏し給うたことを云うのであるという。これは恰度火燵を以て、草や木をはさんで焼きつくそうとする時、草木の焼けつきないうちに火燵の方が焼け尽きるようなものである。法藏菩薩は若不生者不取正覚と、一切衆生を済度した上で、自分を後まわしにしながら、自分が先ず成仏し給うのが巧方便である。ここに一切衆生を攝取して共に安樂淨土に往生せしめ度いと発願し成就せしめることが出来るのである。而して彼の安樂淨土は畢竟成仏の道路であり、無上の方便である、と。

次いで障菩提門に、菩薩がこの巧方便廻向成就の義を知れば、菩提に相違する三種の障害即ち我心貪著自身、無安衆生心と供養自身心を離れることが説かれ、順菩提門に、菩提に随順する三種の法即ち無染清浄心、安清浄心と樂清浄を満足に得給うことが説かれてある。而して若し智慧無くして衆生を濟度せんとする時には凡夫の顛倒に墮し、若し方便なくして法性を観ずる時には實際即ち二乗の無余涅槃に墮してしまふことが明かされている。また菩提を得る障碍を無くしようとするならば、前述の三種の障碍の心を除かねばならぬ。而して順菩提門で説いた三種の清浄心は合すると妙樂勝真心という一心になる。是は遠離我心、遠離无安衆生心と遠離自供養心の三種の心が清浄に増進して合して妙樂勝真心となるのであることが説かれている。次に還相菩薩の衆生利益の願事成就について、菩薩は、智慧、方便、無障、勝真の四心をもって衆生を濟度し、安樂国土に往生せしめ給う。菩薩がこの心をもって衆生を導くとは、この心を衆生に廻向して衆生の心とし、往生の正因とすることであり、即ち信心である¹⁰⁶⁾、と。つぎに五念の行成就は、上の願心成就とともに成就せられたる大行を明す。そしてこの心行の成就是もと法蔵菩薩によりてなされたことは明らかである¹⁰⁶⁾、と。次に利行満足とは五種の門があつて漸次にその功德を成就し、修行成就しおわれば、教化地に至ることを明かしてある。而して、

此、五種門、初、四種門成就入功德、第五門成就出功德。此入出功德、何者是。釈言入第一門者、以下禮拜阿彌陀仏為生彼國故、得生安樂世界、是名第一門。、、入第二門者、以下贊嘆阿彌陀仏、隨順名義稱如来、名依如来、光明智相修行故、得入大会衆數、是名入第二門。、、入第三門者、以下一心專念、作願生彼修奢摩他寂靜三昧行故、得入蓮華藏世界、是名入第三門。、、入第四門者、以下專念觀察彼妙莊嚴、修毗婆舍那故、得到彼所、受用種種法味樂、是名入第四門。種種法味樂者、毗婆舍那中、有觀仏国土清淨味・攝受衆生大乘味・畢竟任持不虛作味・類事起行願取仏土味。有如是等、无量莊嚴仏道味故、言種種。是第四功德相¹⁰⁵⁾

とあつて、專心に極樂の依正二十九種の莊嚴を禮拜、讚嘆し、作願、觀察して、この行成就して極樂に生まれるのであることが説かれてあるが、專心に極樂の莊嚴を觀察して極樂に生まれると国土の清浄の功德を觀じて得る法樂、一切衆生を攝取し淨土に迎え取るという大乘の功德を觀じて得る法樂、阿彌陀如来の不虛作住持の功德を觀じて得る法樂、菩薩の衆生の機類に随つて種々の行を起し、これを以つて仏土を感得したいと思召す功德を觀じて得る法樂等、種々の仏道を莊嚴し各々の衆生に仏道を増進せしむる法樂がある、と。而してこの極樂に於いて得る法樂を、今こそ世界に於いて二十九種莊嚴を觀察するのが、この功德を得る因相である、と。次いで、

出第五門者、以下大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身、回入生死、闍煩惱林中、遊戯神通、至教化地。以本願力、回向故、是名出第五門。示応化身者、如法華經、普門示現之類也。遊戯有二義。一者、自在義。菩薩度衆生、譬如師子搏鹿、所為不難。如似遊戯。二者、度无所度義。菩薩觀衆生、畢竟无所可有。雖度无量衆生、実无一衆生得滅度者。示度衆生、如似遊戯。言本願力者、示大菩薩於法身中、常在三昧、而現種種身、

種種神通、種種說法、皆以本願力起譬如下阿修羅、琴雖无鼓者、而音曲自然、是名教化地、第五功德相¹⁰⁵⁾

とあり、山辺、赤沼らは、ここは還相菩薩が文面の如く歴次入証することを示すのが主眼ではなくして、説明すればこれだけの自利の内容をもっている利他であることを述べたものである。故に際どく云えば、利行満足ということは自利を円備したる還相菩薩の利他という意味である。故に第五の教化地を述べた後に「応化身」「遊戯神通」の「遊戯」並びに、「本願力」を解釈した文を引用して、自然不可思議なる本願力の活動を説いておられる¹⁰⁶⁾という、次いで証卷総結の文として、

爾者、大聖、其言、誠知、証大涅槃、籍願力、回向還相、利益願利他、正意、是以論主、布廣大无尋、一心、普徧開化、雜染堪忍、群萌、宗師、顯示大悲、往還、回向、慇懃、弘宣、他利利他、深義、仰可奉持、特可頂戴、安¹⁰⁵⁾。

とある、この文は釈尊の経説は、上來說き来った如く一切の衆生が浄土に往生して大涅槃を証することは、ひとえに阿弥陀如来の本願力の廻向に依り、そしてまた浄土からこの娑婆世界に帰って衆生を済度することも、阿弥陀如来の他力廻向に依るのであることを説き明かしたものである。それであるから天親菩薩は「浄土論」を造って、貪瞋煩惱に碍げられず、如何なる衆生も普く摂取し給う法を信ずる一心を説き、この雜染にけがれた娑婆世界の衆生に、本願を開示教化され、曇鸞大師は、往相廻向も還相廻向も皆阿弥陀如来の大悲心より廻向し給うものであることを開示し、天親菩薩が自利々他と宣うたその利他の語について、他利と利他の区別を示して、その深義を開示して下されたのである。されば何人もこの弥陀如来の他力廻向の法を仰いで奉持頂戴すべきでありますとの親鸞聖人の開示であり、おすゝめであります。

また、真仏土卷には、安楽浄土は無量光明土であって、煩惱や無明のけがれがないので、煩惱成就の凡夫なれども、願土にいたれば速に三界の繫業畢竟して牽かず、煩惱を断ずることのない凡夫、速に無上涅槃の清浄の功德を成就し、還相廻向の妙用をなすので、論註には、「莊嚴清浄功德成就」と云い¹⁰⁷⁾、また安楽浄土は清浄平等無為法身の土なるがゆえに、往生するほどのものは必ず清浄平等身を証り、一度証って後は其の清浄の性で莊嚴されて、何時までもあらたまらないので「莊嚴性功德成就」と名づく¹⁰⁷⁾、と。

また「論註」下巻観行体相の中、国土体相の十七種莊嚴悉く不可思議力を成就することを積して、依報十七種の国土の莊嚴に、因位の大願業力と果上の自在神力と二力を含蔵する事を明かし次いで阿弥陀如来の自利々他を円満したる真報土なることを顯し、浄土の莊嚴はたゞ十七種ばかりにあらざ、無量の莊嚴あれども、無量を十七種につづめて顯はすゆへに略説と云う。十七種の莊嚴の中へ無量の莊嚴を取め尽くしたは、大心海より現われ給う天親菩薩の智慧力なり、と云って、依報十七種を以って真仏土に収める義を明かし、不虛作功德の文を引用して正報八種をもって真仏土に収められている^{107),29)}。

而して『大經』異訳及び『涅槃經』、『浄土論』、『論註』、『讚弥陀偈』、『述文讚』を引用されて無明煩惱しげき感染の衆生は、此の娑婆に於いては煩惱におゝわれて見性成仏する事能わず。しかれども安楽国は無為涅槃界なるが故に、願土に至ればすみやかに必ず無上涅槃の仏性を顯わす。これ本願力の廻向によるが故なり。即ち「涅槃經」に未来に清浄の莊嚴身を具足して法性を見る事を得るとあるは、その安楽国に至りて証る仏性の事なりと、浄土見性の義を示し給う^{107),29)}。

浄土和讃の讃阿弥陀仏偈和讃には、

妙土広大超数限 本願莊嚴しやうごんよりおこる

清浄大摂受に 稽首帰命せしむべし¹⁰⁸⁾

と、こゝにある莊嚴とは、大乘義章九五十二右に涅槃経を引いて、言「莊嚴」者如涅槃説、分別有四「一 莊嚴、二 莊嚴、三 莊嚴、四 莊嚴」等四語行共相莊嚴故曰「莊嚴」とあって、今は、因位の願行に因りて果徳を飾ることを莊嚴と云う。今こゝの本願莊嚴と云うがそれで、弥陀の浄土の妙境界相はことごとく法蔵因位の本願力より顕はすところ、夫を本願莊嚴という¹⁰⁹⁾。と。また、

自利々他円満して

帰命方便巧莊嚴

こゝろもことばもたへたれば

不可思議尊を帰命せよ¹⁰⁸⁾

と。眞実報土の莊嚴も智慧門の方では唯仏与仏の境界にして、見ることも説く事もできない莊嚴である。それを弥陀の慈悲方便門からは宝地宝楼宝閣等の莊嚴を飾りたてゝ十方衆生を摂受し、思いの儘に衆生に法楽を受用せしめ給う。この讃は方便門の方であるから方便巧莊嚴と云う。安楽浄土の依報の莊嚴はたゞ一切衆生の為に成就なされたので、弥陀の慈悲方便門から顕わすところであるということ方便巧莊嚴と云う。今弥陀の報土は自利利他円満なる故に、弥陀の正覚成就の報土が即ち衆生の為の方便巧莊嚴¹⁰⁹⁾であることを示して共に帰命の一念をおこさしめんとの思召しでありましょう。

また、勢至讃には、

染香人のその身には

香氣あるがごとくなり

これをすなはちなづけてぞ

香光莊嚴とまふすなる

とあり、これは楞嚴經十四左の如「染香人、身中香氣、此即名曰「香光莊嚴」とある經文によりて示したものであり、楞嚴ノ義疏五十九左には、染香人、身中香氣、此即名曰「香光莊嚴」とある。香のカホリを仏に喩へ、香に染ることをば衆生の憶仏念仏に譬へたまひしもので、衆生の心に仏を念ずるゆえに仏は常に衆生の心に入りて在す。また衆生が常に口に念仏を称うるゆえに仏は常に衆生の口についていたまうなり、上の二句に念仏三昧を香りに譬え、其の念仏三昧を名づけて香光莊嚴と云うとなり。莊嚴とは大乘義章に、因行を以て果徳をかざる事を云うとあり。今念仏三昧は因にて仏を見奉るは果なり。そこで念仏三昧の行をもつて果を莊嚴するゆえ必ず必ず仏を見奉るなり。染香人の身には香氣ある如く、念仏三昧の行を修するものは、この念仏の行を以て行者を莊嚴するなり。形はいかようなりとも、罪は十惡五逆の凡夫なれども、念仏三昧の行をもて莊嚴するゆえに、現前当来遠からずして如来を見奉る利益をうるとなり¹⁰⁹⁾。と。

尊号眞像銘文（広本）には、

眞像光明持善導和尚眞像銘文 智栄讃「善導別徳」云。「善導阿弥陀仏化身。稱「仏六字」、即嘆「仏」即懺悔、即発願廻向。一切善根莊嚴淨土。」¹⁰⁾

「称仏六字」といふは南无阿弥陀仏の六字をとらふるとなり。「即嘆仏」といふは、すなわち南

无阿弥陀仏をとふるは仏をほめたてまつるになると也、また「即懺悔」といふは、南无阿弥陀仏をとふるは、すなわち无始よりこのかたの罪業を懺悔するになるとまふす也。「即発願廻向」といふは、南无阿弥陀仏をとふるは、すなわち安楽浄土に往生せむとおもふになる也、また一切衆生にこの功德をあたふるになると也。「一切善根莊嚴浄土」といふは、阿弥陀の三字に一切善根をおさめたまへるゆへに、名号をとふるはすなわち浄土を莊嚴するになるとするべしと也と、智栄禅師善導をほめたまへるなり。

とある¹¹⁰⁾。

また、如来会卷下に、

阿難、皈令我身任兼百千億那由他劫、以無礙、弁欲具稱揚彼諸菩薩摩訶薩等、真実功德、不可思議¹¹¹⁾

とあるを、親鸞聖人は浄土和讃、讃弥陀偈讃に引用されて、

安楽国土しやうごほの莊嚴は

釈迦无導のみことにて

とくともつきじとのべたまふ

无称仏を帰命せよ

と、讃嘆されております。

仏徳讃嘆ということは、釈迦无導自在なる弁財を以ってしても説き尽すことは難しいのであるから、この不可称不可説不可思議の弥陀如来に帰命して念仏すべきことをすゝめられるのであります。

以上の如く「莊嚴」の義について考えると、智度論に云うところは、仏は能く三千大千世界の一切の土地をして皆悉く莊嚴ならしめたまい、それは恰も人の貴客を迎える時の如くであり、それによって一切衆生は皆悉く和同し、心転じて善を為す。また人が遠くに行くとき沢山の資糧を用意するが如く、また賊を破る時色々の道具を身につける如く、仏は諸の福德、智慧を集めて資糧とし、六波羅蜜を行じて自ら莊嚴すと。

而して大乘莊嚴經論には、義をよく知り、無垢なる言葉、適切なる文章を以って、義を明らかに開示することが、そのものを莊嚴することになる。如来も巧みな説法により、最上の教によって、衆生のため真実の義を開示莊嚴して、衆生に満足を与えるのである。と説く。

されば「一生之間能莊嚴」なるお言葉は、弥陀の化身救世菩薩が、釈尊を始めとして、菩薩や高僧方の経、論、釈を通じて、此の世に浄土の莊嚴を開示され、我等に浄土往生の信心を開発され、更に我々の称える仏徳讃嘆の念仏を、浄土の莊嚴を開示して、他をして浄土往生をすゝめる無垢適切なる言葉であることを親鸞聖人にお示し下されたのではないであろうか。

而して救世菩薩は、此是我誓願也、善信この誓願の旨趣を宣説して、一切の群生にきかしむべし、とお告げになられております。

聖人はこの告命を奉戴して、その著「教行信証」に、大経、論註などの無垢なる言葉、適切なる文章を前掲の如く種々ご引用になり、本願成就の三種二十九種莊嚴は、全く一切衆生の苦を抜き、真実の法楽を与える浄土に迎え入れんがために成就された莊嚴であり、而してその本体は「諸ノ善法ヲ撰シ、諸ノ徳ノ本ヲ具⁷⁰⁾」している弥陀の本願名号より他はなく、この本願を信じ名号を称する人の身に、この莊嚴功德がみちみちて、他力の信心となり、この世では正定聚不退の位につかしめ、願土にいたればすみやかに無上涅槃を証せしめることを開示されたのであります。

この教を尊く奉戴した念仏者、信心の行者は、 仏徳をたゞたゞ讃嘆せずにおれません。そしてたとい数千万億の人々に対しても、 この本願念仏のご旨趣を開示しようとの真実積極的な所謂布教にかりたてられることでありましょう。 而して真の布教とは「たゞ念仏して弥陀にたすけられ」よと開示する以外の何事でもなかったのである。 さればこの念仏者こそ、 真に浄土を莊嚴する者であり、「大悲ヲ行ズル人⁷⁶⁾」ともいうべきでありましょう。

総 括

法蔵菩薩は不急のことを争う衆生のため、 兆載永劫のご修行によって、 自力の諸善万行に比して、 凡夫成仏の速かなることを成就なされたのであります。

今生に於いては「ご存知のように¹¹²⁾」人が人を救うことは出来ないのであるから、 一切衆生を済度せんと欲する場合、 いそぎ彼の浄土に往生して成仏することを願え、 本願力のゆえに疾く往生出来、 今生には速かに正定聚不退転に住することが出来る。 而して浄土に往生して、 還相廻向によってはじめて衆生済度の大行を速かになし遂げられるのである。

而してこの道をゆく人々の心情こそ、 直ちにこの世で人を救おうとする人々以上に、 真実疾く疾くの切なるものがあり、 また、 今一際疾く疾く浄土に往生して仏のさとりをひらいて後、 いそいで娑婆世界に帰ってきて、 仏の神通力をもって皆悉く浄土に迎えとってやろうという期待意志のみが、 そのやるせない気持を慰めることでもあったであります。

而して、 親鸞聖人は、 この「速かに浄土に生れて」の心そのものは、 実は如来廻向の信心より出ていたのであり、 本願を信じ「念仏まふす」うちに、 速かに生死を離れて無上菩提を願う心、 即ち度衆生心が極速円満されていたことに気付かせられたのであります。 されば弥陀の本願を信じ、 この信心のさだまったものは、 行者のはからいはちりほども必要ないのであります。

而して、 真実信心をうれば、 現在に正定聚不退転の位につくことであり、「念仏していそぎ仏になりて」の「念仏して」は、 たゞ「念仏まふす」信心の生活、 正定聚不退転の生活のうちに「いそぎ仏になりて思うが如く衆生を利益する」心情も、 からくりも、 極速円満に成就されてあったのであり、 即ち「しかれば念仏まふすのみぞ、 すゑとをりたる大慈悲心」であったのであります。

而して、 この念仏申すことは、 仏徳讃嘆、 顕真実の生活でありまして、 親鸞聖人のご一生は、 全くこの仏徳讃嘆、 顕真実のご一生であったと云っても過言ではないと思ひます。

親鸞聖人は、 大経、 論註などにより、 無垢なる言葉、 適切なる文章をご引用になり、 本願成就の浄土の莊嚴は、 全く一切衆生の苦を抜き、 真実の法楽を与える浄土に迎え入れんがために成就された莊嚴であり、 その本体は弥陀の名号そのものであることを開示莊嚴されたのであります。

仏徳を讃嘆し、 浄土の莊嚴を開示することは、 釈尊の言葉を以ってしても尽し得ないので、 私共に於いては、 ただ南無阿弥陀仏を称えることだけであります。 而してこの称名念仏に前記のようなあらゆる功德がこもっていて、 真に自己の救われてゆく道をよるこび、 自然にあふれ出る開示讃嘆の聲が、 またあらゆる人々をして、 その道を選ばしめ、 歩ませることになるのであります。

「しかれば念仏まふすのみぞ、 すゑとをりたる大慈悲心にてさふらうべき」であったのであります。

擱筆するに当り、 未熟なる言葉によって真実なるものを冒瀆したことをおそれ、 念仏と共に諸賢のご賢察ご叱声を乞うのみであります。

主 要 参 考 文 献

- 1) 真宗聖教全書：2～775頁興教書院，昭，24，
- 2) 香月院深励：歎異抄講林記卷下「真宗大系24卷」60頁真宗典籍刊行会，昭4。
- 3) 増谷文雄：歎異抄，28頁（註）筑摩書房 昭39。
- 4) 曾我量深：歎異抄聽記 176頁大谷出版社 昭22。
- 5) 梅原真隆：歎異抄講義（大藏經講座17卷）261頁東方書院 昭8。
- 6) 蜂屋賢喜代：歎異抄講話105～125頁大谷出版社 昭38。
- 7) 多屋頼俊：歎異抄新註 7頁法藏館 昭29。
- 8) 寺田弥吉：現代に生きる歎異抄84頁雪華社 昭38。
- 9) 金子大栄：現代人の古典，歎異抄81頁コマ文庫 昭40。
- 10) 福島政雄：歎異抄身読記74頁丁子屋 昭27。
- 11) 本多顕彰：歎異抄入門85～86頁光文社 昭39。
- 12) 無量寿経卷下：真宗聖教全書1～31頁。
- 13) 歎異抄第九章：同 上 2～777頁。
- 14) 教行信証信卷末：同 上2～80頁。
- 15) 流転三界偈：河野法雲，雲山竜珠，真宗辞典，778頁，法藏館，昭27。
- 16) 開悟院靈性：高僧和讃丁亥記，新編真宗大系第10卷51頁，真宗典籍刊行会，昭25。
- 17) 真宗聖教全書2～502頁。
- 18) 安楽集：同上1～416，417頁。
- 19) 同 上：同上1～378頁。
- 20) 教行信証信卷：真宗聖教全書2～59…60頁。
- 21) 無量寿経卷上：同 上 1～7，26，35頁。
- 22) 和語灯録：同 上 4～552，553頁。
- 23) 教行信証行卷：同 上 2～6頁。
- 24) 尊号真像銘文：同 上 2～561頁。
- 25) 仏説無量清浄平等覚経卷二同上 1～99…101頁。
- 26) 教行信証行卷：同 上 2～7…8頁。
- 27) 教行信証真仏土卷：同 上 2～122頁。
- 28) 愚禿抄卷上：同 上 2～462頁。
- 29) 開華院法住：教行信証金剛録（後6卷）新編真宗大系第9卷172，201，213頁。
- 30) 仏説無量清浄平等覚経卷三：真宗聖教全書1～113…114頁。
- 31) 仏説阿弥陀三耶三仏薩埵檀過度人道経卷下：同上1～166…167頁。
- 32) 同 上 1～183頁。
- 33) 仏説無量清浄平等覚経卷四：同 上 1～131頁。
- 34) 大宝積経：同 上 1～204，212頁。
- 35) 仏説大乘無量寿莊嚴経卷上：同 上 1～217，221，222…223頁。
- 36) 同 上 卷下：同 上 1～240頁。
- 37) 称讃浄土仏授受経：同 上 1～246，250…251頁。
- 38) 易行品第九：同 上 1～254頁。
- 39) 往生要集：同 上 1～914，915頁。
- 40) 教行信証行卷：同 上 2～11頁。
- 41) 六要抄第二：同 上 2～238頁。
- 42) 無量寿経優婆提舎願生偈：同 上 1～270，277頁。
- 43) 無量寿経優婆提舎願生偈註卷下：同 上 1～331，346…348頁。
- 44) 教行信証行卷及び真仏土卷：同 上 2～36…37，2～135頁。
- 45) 一念多念文意：同 上 2～616頁。
- 46) 開華院法住：教行信証金剛録（前二卷）新編真宗大系第八卷，298頁。
- 47) 遠山諦観：教行信証精解，158頁註，新潮社，昭，13。
- 48) 略論安楽浄土義：真宗聖教全書1～368頁。
- 49) 高僧和讃：同 上，2～502頁。
- 50) 安楽集：同 上，1～420…423，428，429，431…432頁。
- 51) 観経玄義分卷第一：同 上，1～441，449頁。
- 52) 皆往院鳳嶺：観経玄義分庚申記第一，新編真宗大系，62～66頁。
- 53) 観経正宗分散善義卷第四：真宗聖教全書1～546，552，556頁。
- 54) 選択集（下）：同 上，1～970頁。

- 55) 教行信証化身土卷(本): 同上 2~160頁。
- 56) 開華院法住: 教行信証金剛錄(前二卷)新編真宗大系第八卷, 358頁。
- 57) 往生要集卷上本: 真宗聖教全書, 1~751...2 .757頁。
- 58) 境野黃洋: 勝鬘經講義(大藏經講座) 471頁。
- 59) 往生要集卷上末: 真宗聖教全書1~787...788, 791, 793, 795頁。
- 60) 往生要集卷中本: 同上, 1~811頁。
- 61) 同上, 卷中末: 同上, 1~842頁。
- 62) 同上, 卷下末: 同上, 1~925頁。
- 63) 選択集(下): 同上, 1~973...4, 985...6, 990頁。
- 64) 円乗院宣明: 選択本願念仏集枢要, 新編真宗大系第七卷203頁。
- 65) 教行信証行卷: 真宗聖教全書, 2~33頁。
- 66) 開華院法住: 教行信証金剛錄(前二卷), 新編真宗大系第八卷 275~280頁。
- 67) 拾遺黒谷上人語灯録卷下, 御消息第三, 真宗聖教全書 4~748頁。
- 68) 教行信証教卷: 同上, 2~4頁。
- 69) 開華院法住: 教行信証金剛錄(前二卷)新編真宗大系第八卷 126~127, 149~150, 159, 249 頁
- 70) 教行信証行卷: 同上, 2~5, 7...8, 24, 30, 41頁。
- 71) 正信念仏偈: 同上, 2~46頁。
- 72) 教行信証信卷(本): 同上, 2~48, 63頁。
- 73) 遠山諦観: 教行信証精解, 204頁註, 新潮社, 昭13。
- 74) 開華院法住: 教行信証金剛錄, 新編真宗大系第八卷 83頁。
- 75) 柏原祐義: 浄土三部經講義(大藏經講座) 174頁註, 東方書院, 昭7。
- 76) 教行信証信卷(末): 真宗聖教全書2~73, 77頁。
- 77) 唯信鈔文意: 同上, 2~632頁。
- 78) 教行信証化身土卷(本): 同上, 2~151, 157, 166頁。
- 79) 往生礼讃偈: 同上, 1~649頁。
- 80) 遠山諦観: 教行信証精解, 594頁, 新潮社
- 81) 浄土文類聚鈔: 真宗聖教全書, 2~454頁。
- 82) 尊号真像銘文(略本): 同上, 575頁。
- 83) 愚禿鈔卷上: 同上, 2~459頁。
- 84) 入出二門偈: 同上, 2~482頁。
- 85) 往生礼讃偈: 同上, 1~669頁。
- 86) 開悟院靈性: 高僧和讃丁亥記卷上, 新編真宗大系第十卷, 39, 69, 77, 90頁。
- 87) 親鸞の世界: 95頁, 東本願寺, 昭, 39。
- 88) 末灯鈔, 真仏御房御返事: 真宗聖教全書, 2~673頁。
- 89) 高井観海: 即身成仏義講義, 大藏經講座15卷下75頁東方書院, 昭9。
- 90) 教行信証信卷本: 真宗聖教全書, 2~49頁。
- 91) 一念多念文意: 同上, 2~604.頁
- 92) 浄土和讃: 同上, 2~485.頁
- 93) 普賢大門: 真宗教学の諸問題, 349頁, 百華苑, 昭, 39。
- 94) 笠原一男: 親鸞研究ノート, 92頁, 図書新聞社, 1965年
- 95) 教行信証信卷: 真宗聖教全書, 2~57頁
- 96) 教行信証証卷: 同上, 2~106...107頁
- 97) 大原性実: 真宗教学の伝統と己証, 永田文昌堂, 昭, 40。
- 98) 赤松俊秀: 鎌倉仏教の研究, 平楽寺書店, 昭, 40年。
- 99) 覚如: 本願寺聖人伝絵(東本願寺本), 親鸞聖人全集, 言行篇 2, 11, 201, 246頁。
- 100) 真野正順訳: 大智度論卷第四, 第十, 国訳一切経釈経論部一, 113, 266~267頁, 大東出版社, 昭. 10。
- 101) 真野正順訳: 大智度論卷四十五, 卷四十六, 国訳一切経釈経論部三, 297, 314頁。
- 102) 宇井伯寿: 大乘莊嚴經論研究, 39~43, 583頁, 岩波書店, 昭, 36。
- 103) 教行信証行卷: 真宗聖教全書, 2~14, 16頁。
- 104) 教行信証信卷: 同上, 2~59, 60, 66, 94頁。
- 105) 教行信証証卷: 同上, 2~104, 105, 106, 109...118頁。
- 106) 山辺習学・赤沼智善: 教行信証講義信証の卷, 1030...1063頁。
- 107) 教行信証真仏土卷: 真宗聖教全書, 2~133, 135, 140頁。
- 108) 浄土和讃: 同上, 2~489, 490, 499頁。
- 109) 香月院深励: 浄土和讃己未記卷三, 新編真宗大系第十一卷, 225, 229, 472頁。

- 110) 尊号真像銘文(広本): 真宗聖教全書, 2~587頁.
- 111) 如来会卷下: 同上, 1~208頁.
- 112) 藤岡隆男: 歎異抄第四章にいわれる「存知のごとく」の意義に対する一私見, 札幌大谷短期大学紀要, 3号39頁1966.
- 113) 光遠院慧空: 御伝絵視聴記, 真宗大系31卷, 227頁上.
- 114) 柏原祐義: 浄土三部経講義, 120頁, 大藏経講座, 東方書院, 昭, 7.